

芥川だより

発行日***2018年1月1日 e-mail:akutagawa_dayori@yahoo.co.jp
最新号から創刊号まで閲覧できます。 http://akutagawadayori.sakura.ne.jp/

編集発行人 下村嘉明

発行所

☆ 着物から服へ

着物から服を仕立てます

高槻市芥川町2 -1 4 -3

TEL072-681-8870



***** 一部100円です *****

まさかの来店！



のれんをかき分けガラス越しにのぞいた顔を見て、「あっ、戸田巽さんだ」と私は舞い上がった。長年にわたって気になり、「もう、伝説の人になられたのでは？」などと半ばあきらめていた人である。もう一度、どうしても会って話を聞きたい人であった。

「あんたと違うような体型になったなあ」と店に入るなり戸田さんは言われた。「そうです、戸田さんを見習って歩いていて元気になりました。今度はマラソン大会にも出ます」「おれもなあ、あれから2年ばかり入院してなあ」「生きておられたんですね」「ああ、退院後、半年ばかりうつ病になっていたが、近くの丘にでも登ろうかと思

毎日通うようになって行き交う人との会話でうつが治った、毎日10人ぐらいの人と話をしたおかげや」「よかったですね、独り家の中でのいるとおかしくなりますから」「それで、少し元気になって今度は山を見たいと思い出して富士を見に行った。五合目の小屋に予約入れて行ったら小屋の人が、戸田さんが来ると皆に知らせていたので五合目から富士を眺めていたら皆が集まってきて話をしながら富士山に登り下りてきた。90歳を超えて日帰りの弾丸登山をした人はいないと小屋の人が言っていたわ」「そしてな、今年も行ってきた」「さすがですね、元気や」「それでもなあ、しないとあと3ヶ月というからまた手術をする」「またですか」「胃、腎臓、リンパなど幾度もガンの手術をしたので腸が回復せず、独り暮らしやから調理が大変、もっと楽な生活も出来るけどなあ」「戸田さん、畳の上で死のうなんて思ったらあきませんよ、歩きながら逝く」「しかし、90歳で富士山に登るのは、相当の苦勞がいる…」

わずか30分ばかりの会話をして戸田さんは帰られた。帰り際「戸田さん、体重は40キロ?」「いや、気張って46キロにした」文句なしに尊敬する戸田巽さん。戸田さんが「芥川だより」を読まれて私が山好き酒好きとわかり、毎日40キロほど歩かれていたので、各地の銘酒をリュックに詰めて歩いて店に届けて頂いた。ほんとうにありがたい酒を幾度も飲ませていただいた。帰られたあと、すがすがしい気分になった。戸田さんと会った後に感じる爽快感である。幾つになっても、健康の基本は歩くことです。

詩をめぐるあれやこれ(40)

石川 吾郎

廬山

年の初めですので、今年も漢詩を。

中華料理のトンポーロウ(東坡肉)でお馴染みの蘇東坡(蘇軾)が、名峰・廬山で詠んだ詩です。

題西林壁 西林の壁に題す

横看成嶺側成峯 横に看れば嶺をなし、側には峰を成す

遠近高低無一同 遠近 高低 一にも同じきは無し

不識廬山真面目 廬山の真面目を識らざるは

只緣身在此山中 只だ身の此の山中に在るに縁る

横の方からみれば一続きの山なみ、

片側からなら独立した峰となる。

遠い近い、高い低い、

どこから見ても同じものはない。

廬山の真の姿が分らないのは、

我が身がこの山の中にあるからこそ。

廬山の姿の多様で奥深い素晴らしさを詠いながら哲学的な深みに達している名詩だと思えます。

思えば、何事も見る角度によりその姿は変わり

真っただ中にいる者にとって、対象物の全体像は

見えない、という重要な指摘。

多角的な視点と想像力を合わせもつ必要がある

ことを教えられる。

それにしても安倍政権はあらゆる角度から見

この国を毀損し国民を苦しめる政権です。

種子法廃止一つをとっても、わが国の食料主権を

遺伝子組み換え企業に売り渡し、未来にとんでも

ない禍根を残します。

今年こそ安倍政権を倒さなければ・・・

素老人☆よもだ帳 (46)

坂本 一光

巻頭エッセイ	下村嘉明	1
巻頭コラム	石川吾郎	1
素老人☆よもだ帳	坂本一光	2
哲学屋のつづやき	祖蔵哲	4
大峰奥駈道 14	梵店主	7
大人の今昔物語 41	石川吾郎	8
我がおくのほそ道の旅 12	成瀬和之	9
B級サラリーマン渡世譚 54	明石幸次郎	10
オクラの山たより 16	困了生	11
代名詞でしか表現できないもの	大江雅鬼	15
孫ウオッチング	福田圭	18
おつちよこチョイぼけ 57	A O	19
埋め草	C	20
編集後記	嘉	21
女90年の軌跡	眞糺	22
俳句	土田裕 影山武司	22



◆二〇一七年僕の漢字は核と闇

二〇一七年の漢字『北』に私は与しない。与しないと云ったが、なぜ『北』か、選択者にその言い分を聞いたわけではない。したがって以下は素老人の勝手な言い分である。反論や非難の類ではないことをお断りしておく。

それでは、なぜ素老人は二〇一七年の漢字に『核』と『闇』を選ぶか。

まずは『核』について、

北の核南の核も核は核

である。北の核は悪魔の核（あるいは何をしでかすかわからぬころつきの核）で、南の核は正義の味方の核、と素老人は考えない。抑止力神話は、原子力発電所が『過酷事故』を起こすことはないという安全神話に似ている。核兵器や核の傘が、平和を維持するのに必要な抑止力だとは思えない。戦後四十数年続いた米ソの冷戦期間中も戦争は起きたし、また継続もした。戦争は一方または双方の政策として引き起こされることもあり、偶発的な出来事や予期せぬ行き違いが発端になることもある。いずれであれ、戦争当事者双方の軍事力は戦争の抑止に役立っていない。

また、国連の場では核兵器禁止条約が採択され核なき世界の実現を目指す、批

准に向けた大きな前進が始まった。運動の一翼を担った国際的なNGOの連合体

「核兵器廃絶国際キャンペーン」(ICAN)へのノーベル平和賞授章もあった。

広島で被爆したサーロー節子さんは、被爆の体験を語り、「核保有国の政府や「核の傘」の下で共犯者となっている国々の政府」を批判、「核兵器は必要悪ではなく絶対悪だ」と授賞式で述べている。一方、

核の傘に入ることを積極的に選択し続ける日本は、核廃絶は遠い将来の究極の目標であり、核禁止条約は核保有国と非保有国の溝を深めその目標達成を妨げるだけだと反対している。『核』は世界の、また朝鮮半島を巡る東アジアの平和に関わる二〇一七年の重要なキーワードであった。『北』自体がキーワードであったのではない。

次に『闇』。森友学園の『瑞穂の国記念小学校』を開設するための学校認可と国有地払い下げ問題、加計学園岡山理科大学の獣医学部を国家戦略特区に新設認可する問題で、国民は囚らずも日本の政治の深い闇を垣間見た。

付度が神風吹かす国の闇

闇の国日本は未だ健在である。昔、人が深淵を覗けば深淵が覗き返す、という映画(注1)があったように思うが、国民は一強が潜む闇の深淵から覗き返されっぱなしでこのまま終わるのだろうか。

『闇』はまた『核』にも関わる。

北に核南にも核の闇

原爆も原発も核の闇

『闇』もまた、二〇一七年の日本の政治を語る重要なキーワードであった。新しい年の漢字は、夢と希望を表すものであって欲しい。

◆自分のことをどのくらい知っていますか、または「心ならずも」について

前号に続いて韓国ドラマ『チャングムの誓い』の一場面から。宮廷の料理所である『水刺間』(スラッカ)の『最高尚宮』(チェゴサンゲン)の職を解かれ追放されるチェ・クミョン(注2)が、宮中を去るときにチャングムに語る言葉は興味深い。

「…お母様があなたに残した手紙よ。叔母様に『燃やせ』と言われたけどできなかった。それが私よ。一族の一員としては迷いがあり、だからといって自分の意志を貫けない。心から自分を信じられず、心から自戒することもない。曇りのない才能もなく、曇りのない真心もない。ひたむきに思われることもなく、ひたむきに恋に生きることもない」

この言葉は、チャングム同様に聡明であったクミョンが、我が人生を「心ならずも」歩んだものとして悔いているように聞こえる。しかし、「心ならずも」の人生もまた自分で選んだ人生である。人間は社会的存在であり、社会が個人に付け

たらよいかという人生の設計図そのものを遺伝子の中にプログラムされていない人間にプログラムされているのは、自分で目的や目標を見つけ、それを実現する計画を立て、設計図を作り、意識的に行動するために、さまざまなことを学習し、学ばなければならぬ、ということだけのです。

それでは、人間が学習によって獲得する力、学力とはなにか。学力とは、単純に、テストの点数だけを意味するものではありません。点数はいつでもいいというのではありません。しかし、学力というのは、本当はもつともつと深い力です。

目的に向かって行動するとき、困難に出合っても負けない力、これも学力です。また、美しいもの、善いもの、真なるものを求める力も学力です。人間として美しいものと醜いものを見分ける力、人間としてそれは恥ずかしいことだと恥を知る心、時に及んで必要になるやさしさとか勇気を出す力、自分を健康で丈夫にしようとする力、人間らしいよりよい生活をするために知恵と技術を学ぶ力、これらすべての力は学力です。学力というのは、一言で言えば、人間らしく生きようとする力、生きていく喜びや夢をつくる力だと思えます。

それぞれが一人でたつことができる力を身につければ、自立した一人ひとりが結ぶ手は、それだけ固くなります。

皆さんは、多くの人たちとの出会いの

中で、よく学び、これが私の、私が考える、幸せな誇りある生き方だと、将来はそう言えるようになるものを、いま見つけようとしています。いま学校で学んでいることは、これから進む学校でも、また、その先、社会に出てからも、きっと皆さんを助けてくれる力になります。

皆さんの前には、広い世界があります。目を広く遠く、世界に向けてください。そして、深く心に、自分自身を思ってください。

今日の話はこれで終わりです。

(かたちは心であり、心はかたちになる) ■大分の素老人

(注1)『アビス』(原題 The Abyss) という

一九八九年のアメリカ合衆国のSF映画。

(注2) クミヨンは幼少期からのチャングムのライバルである。チャングムと共に料理道を極めようとする誠実な女官であったが、チエ一族の一員としてさまざまな陰謀に加担する。

なお、チエ一族は、チャングムの母や、母の友人でチャングムの師であるハン尚宮を陰謀により死に追いやり、チャングム自身を奴婢の身に落とした権力者一族である。宮中で陰謀をめぐらし権力を振るうのはクミヨンの叔母チエ・ソングム、ハン尚宮と最高尚宮の地位を争って敗れるが、ハン尚宮を陥れた後に最高尚宮になり、さらに女官長の地位にまで昇り詰める。チャングムはスラツカンの女官から奴婢を経て医女として復活、宮廷に戻る。その後チャングムは母や師の名譽を回復

することでチエ一族への復讐を遂げる。

(注3) たとえば、その任務を離れてからどこかの総理が「原発なんて総理が止めるといえませんが、でも止められませよ」とか(たしか小泉元総理が、フクシマの事故の後の東京都知事選挙を控えた頃にそんなことを言いましたね)、「核兵器は人類を破滅させる兵器であり、人類と共存できない」などと言ったとしても(米国の最高レベルの、しかも複数の元軍人が、退役後にこの種のことを言明している)、それは言わないよりはましかもしれないが、懺悔の値打ちもないことだと私は思う。

これらのことは、原子力発電や核廃絶の運動の進展が時代を変えた、その反映とも言えるかもしれないし、そういう時代の一層の進展に寄与するよいことだとは思わなくても、それにしても不思議に思うのは、元総理や元軍司令官などは「心ならずも」原発政策を推進し、また核による脅迫政策に従事していたのだろうか、ということである。「心ならずも」であったとすれば、現役時代の嘘つきの大罪を告白しなければならぬだろう。その罪は万死に値する。一方、「心ならずも」ではなく、「確信犯」として政策を推進していて、年を経て仕事を離れ、よく考えてみると自分の考えは間違っていたと気づいたのであれば、余程のアホが総理や軍司令官を務めていたことになる。危険極まりないことである。人はそれほどアホではないし、また簡単に変わるものでもないから、恐らくは「心ならずも」原発や核にしがみついていたというのが真実ではないか。戦争もそうであるが、「心ならずも」で国の行方を左右されるのは真つ平(ごめん)である。

哲学屋のつむぎ(42)

祖蔵 哲

意識』を哲学する(一)

西暦二〇〇〇年からすでに十八年も経過し、戦後世代にとっては「夢の二十世紀」である時代が「夢」のような速さで過ぎ去っていく。もう去年の号になってしまったが、そこでお話しした『二〇四五年問題』まであと二十七年。私がその時まで生きて確認できる可能性は極めて低い。現人類にどのような質的変化が突如として訪れるのか、またそれ自体が起こらないのか、見届けたい気もする。今もある人工頭脳技術が驚異的に発展した結果、ある特異点『シンギュラティイ』を越えることとまったく異なる変化が起こるというものである。これは閾値を超えると意味である。これは閾値を超えると意味である。お風呂の水を張るのに水道を少しずつ流すと徐々にその水位は上がるが、その上淵を越えると水は突然と溢れ出す。この限界線が閾値、特異点である。その後の状態は予想がつかない。今までと同じ規則で物事が進まないからである。つまり「法則」自体が変わるのである。単に人工知能に仕事を奪われることだけでは無い。同じような現象面のことだけでは無い。そして、何が起こるか分からないほど「不安」なことではない。幽霊はその正体が分からないからこそ不安になり怖いのである。このような事態は起こらないという

ような技術的な専門家も沢山いる。その方が圧倒的多数である。しかし、実際に起きるかどうかは多数決で決まるわけではない。起こらないという予想は起こって欲しくないという願望の裏返しでもある。そして私が心配しているのはすでにその「予兆」があるのではないかと感じることが多いからである。それは最近の社会の「意識」の傾向に「現れ」出ている。「自国中心主義」「排外主義」「自己中心主義」これらはすべて「昔」はよかつたという言葉と同時に用いられる。人が「懐古」になるのは現在の取り巻く環境が自分を否定するような「気分」を感じるからである。と同時にその人の記憶にある「昔」は本当にあった「過去」の事実なのであろうかという疑問もある。私たちは無意識的に過去を美化する傾向にある。これらの行為はおそらく生命の自己保存機能であろう。自分自身の否定から人間は生きられない「意識」を持つてしまったのである。それはともかく、人間の自己保存機能である「昔がよかつた」を未来の変化への無意識的拒否反応とみる考えは少々飛躍があるかもしれない。

しかしあまりにも身近にある現象である。

1. 相撲事件にみる「昔」という「無意識」と近代「意識」の対立

この「昔はよかつた」の話は今、世間を騒がせている「相撲界での暴力事件」でも見られる。相撲関係のこの種の事件

は今にはじまったわけでもなく以前から数多く発生しているのはマスコミでもその都度報道しているからほとんどの人には承知している。しかし、依然としてくならない。この原因は相撲世界の現代社会に対する「無意識的」な違和感と対立の原因があると思う。たまたまこの事件が「モンゴル(対)日本」という目に見える形で現れたが、その対立は「西欧近代(対)近代化以前の日本」である。日本における「西欧近代」とは明治維新以後のことである。しかし、明治維新以後、日本がすべて急激に「西欧」になったかというところは無理である。まず、頭から変える、「大日本帝国憲法」にみられる「王政(天皇制)復古」から始まった。本来「西欧化」は「市民化」であるはずであるが士農工商の身分制度からそれに変わるには「教育」が必要であるし、また「西欧化」の基本理念である「自由」「平等」「博愛」はそれが「自己主体感」を伴わなければならない。「強制」では達成されないのである。そこで、「個人―天皇―市民」の関係、つまり「天皇」を媒介としてこの理念をとりあえず定着させようとしたのが「日本型近代化」であるとも言える。このような仕組みで近代化を進められていたのであるが、その構造を揺るがす事態が起こった。言うまでもなくそれは「太平洋戦争の敗北」である。半西欧化日本が現代西欧に負けたのである。ここから徹底した西欧「市民化」教

育が開始された。その意味では本来の日本の近代化のスタートは一九四五年からである。

さて、いろいろ歴史的な理屈をこねまわしているが、相撲の話に戻ろう。そもそも「暴力」や「八百長」が犯罪であるという概念は本来近代的ものである。他者に対する「暴力」が「犯罪」であるということは、はすべての人が「法」のもので「平等」であるといった前提で成り立っている。また「八百長」が悪いというものも「公正な取引」という「平等」概念に反するというところから来る。「愛の鞭」「教練のための体罰」は「上下関係の不平等」からは何も問題はない。また「八百長」も「困ったときの貸し借り」であり時間を超えた「博愛」ということであれば何ら疑問はない。つまり、相撲界の「不祥事」は近代という「法」に照らしてみても「事件」である。もちろん「暴力」や「八百長」は相撲界以外でも「犯罪」であるのは変わりがない。しかし、この「相撲界」自体が依然として「近代化」に無意識的抵抗があるところに問題が発生し続ける根本原因がある。

話のついでといつては長くなるが、ここで相撲の歴史を簡単に見てみよう。相撲のはじまりは古く「古事記」に記録があり、「日本書記」にも野見宿禰と當麻蹶速が天皇の前で力くらべをする話

が書かれている。これらの「記紀」はその時代の権力者の正当性を裏付けるために書かれたものであるから、発生からして「自己保存的」であることがわかる。奈良時代に入るとルールが制定され、礼儀作法も含んだものへと変わる。これは隣国中国渡来の「律令」になつたものであることが想像される。その後、天皇による相撲の観戦は「相撲節会(すまいのせちえい)」と呼び宮中行事として平安時代後期まで続く。しかし、鎌倉時代以降、武士の時代になると相撲は心身を鍛えることや戦いに使うために盛んになる。天皇の権威を保つための「神事」としての役割は一旦終わったのである。江戸時代に入り戦いのない時代が訪れると、保護者を失った相撲に存続の危機がおとされる。幕府は暴力的な相撲は本来廃止したかったはずである。活路を見つけたのが「興業(エンターテイメント)」である。ここに相撲は庶民が娯楽として見物するものへと変わる。力士たちは幕府の許可のもと、寺社を建てることや修繕するための資金を集める勸進相撲を行いながら生活していた。こうしてプロの力士集団が興行を行って資金を得る、これが現在の大相撲の原型である。明治時代に入ると相撲は最大の存続危機を迎える。明治維新と文明開化に伴い、一八七一年に東京府で「裸体禁止令」「断髪令」が出されたのである。ここで相撲興行が考えた延命策が権力への接近である。幸いにも「権力」はかつての保護者「天皇」に戻って来ている。再び保護者「天皇」に活路を

見出したのである。これは明治政権との共通利害であるため、ここにめでたく相撲は復活を遂げたのである。そして明治四二年（一九〇九年）に「国技館」という常設興行場をつくってから「国技」というようになった。しかし、未だに「国技」という名称は何の法的根拠もないらしい。さてその後の日本は戦争の歴史に入る。西欧化という強迫をしてアジアに侵略をせしめた。相撲もその国策としての一環を担わされていくことになる。「強い侍日本」、「神がかりの国」、「双葉山物語」などは大いに国民を奮い立たせた。

さて以上のように、相撲の「近代化」の問題をその「歴史」において見るとはつきりとしてくる。つまり相撲が「西欧近代化」という明治維新によりどう変質したかというそれは「西欧化」されたのではなく「先祖返り」したのである。先祖とは「記紀」にある絶対権力者としての象徴世界である。これが相撲の「自己意識」である。最近の相撲事件に乗じて起こってきているのが「ナシヨナリズム」である。「モンゴル力士はモンゴルへ帰れ」「日本人横綱がやっぱ見たい」という「自国中心」「排外主義」。これらの根拠が「相撲が日本の国技」であるという「純血思想」である。これは必ずしも日本だけとは限らない、米国の大リーグでもイチローは「日本へ帰れ」というヤジを何度も聞いたと話している。野球は米国の「国技」である。これらはまさ

しく「人種差別」である。さらに「相撲は国技でありかつ神事だから品格が求められる」との意見もある。しかし政治的ナシヨナリズムを帯びた「国技」に対し、過度に神事としての性質を強調するのは危うい。日本はいまだに政治と宗教が混然一体となった前近代的な国家だと見られかねない。これらの言動を最近は「相撲ナシヨナリスト」と呼ぶそうであるが、この現象は相撲だけに限ったことであろうか。このニュースショウ的事件に関して私見を述べると、いつも私見であるが、反抗している某親方集団は「根拠なき懐古」であり、相撲協会は「意図的根拠を持つ懐古」であろう。そしてそれを傍観している観客はいつの間にか同じ「昔」に連れ戻されている。無意識的に意識させられている。この「無意識的」は意識的よりもタチが悪い。それは無意識的に習得した考えはその「原因」「根拠」が自己にとつて不明なためそれは「自分のオリジナ」「自己自身の意識」だと思つて傾向にあり修正するのが困難であるからである。

2. 「意識」とは何か

さてさて、正月そうそうお屠蘇の酔いがまだ残っているのか本来のテーマから大きく暴走してしまつた。本来の哲学に戻ろう。主題は「意識問題」、前テーマ「死を哲学する」から引き継いでいる。つまり、「人間の死とは何か」を突き詰めると「生きている」とはどういうことか

ということになり、それは「意識がある」状態となったからだ。それではその「意識」そのものの意味はなにかをみてみよう。意識は、一般に、「起きている状態にあること（覚醒）」または「自分の今ある状態や、周囲の状況などを認識できている状態のこと」を指すとされている。ただし、この言葉も「死の定義」と同じようにその意味は歴史的、文化的に多様である。さきほどの相撲の話で「昔」とか「意識させられる」という場合は「思ひ出される」という意味にもなる。意識をはじめ「科学的」に扱つたのは十九世紀のヨーロッパで哲学から分科した心理学であろう。その始祖、ヴィルヘルム・ヴントは意識という概念を中心に心理学を組み立てようとし、意識を自分の感ずる「感覚」「感情」「観念」の三つに分けた。また最近の行動心理学では、意識という概念を用いずに、「刺激と反応」という図式で人間の行動を理解しようとする。さて「意識」といえばフロイトに始まる精神分析学が何と言つても有名である。そこでは人間の心を、「意識」「前意識」

「無意識」の三つに分ける。その「意識」とは自分で現在認識している内容、つまり我々が直接的に「心の現象」として経験していること、これは私の経験だと感じる「ことのできることを総体という。意識は「記憶」と関係があるともされる。そして、この「感じる」内容は後に哲学で扱う「クオリア」の概念に近い。「前意

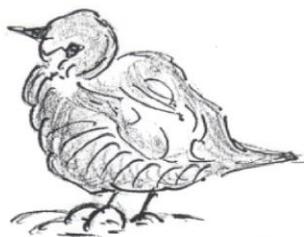
識」とは、自分で現在認識していないが、努力すれば思い出すことができる内容であり、「無意識」とは自分で現在認識しておらず、努力しても思い出せない内容のことである。そしてこの「無意識」が最も重要だとし「自由連想法」などを用いて「意識」に持つていき実験的に理解しようというものが深層心理学の精神分析である。さらにはこの意識現象を身体的物理変化から捉えようとする方向がある。これが現代の「脳科学」である。これらは全て「実証主義的方法」と呼ばれているある種の「科学的分析方法」である。つまり要素を細かく調べていけば必ず「真理」にたどり着けると信じる「要素還元」思考である。しかし、哲学はこのような方法をとらない。全ての前提を疑うのが哲学であるからである。では哲学がいう「意識」とはなにか。これから説明しよう。しかし残念ながら紙面が尽きてしまった。正月気分の手話に時間を費やしすぎたようだ。それでは最後に読者に正月気分を別れを上げさせるような「難問」を与えてこの号を終えよう。も

っともこの紙面を読んでいることはとつとくに正月は過ぎていくだろうが。それはこうだ。あなたは今自分に確実に「意識」があると思つているはずだ。目覚めている限りは。しかし、今、隣にいる貴方の伴侶、家族、友人、そして通りすがりの人々、自分以外の方が本当に「意識」をもっているのだろうか。いや現に「動い

大峯奥駈道(14)

梵店主

ている」「返事もする」。あまり変な質問をする自分が狂ったのかと疑われるが「君は本当に君という人間か」と聞いてみても、おそらく「どうかしているの、当たり前でしょ」という答えが返ってくるだろう。しかしこれらは本当に「意識ある」「人間」かどうかの証明にはならない。「その人」が精巧なロボットであればどうか。それでも中をあげてみれば機械だと分かるというが、ではもつと精巧な我々と同じ肉体、血液を持つサイボーグであればどうか。このサイボーグを哲学では「哲学ゾンビ」と呼んでいる。私はこの「ゾンビ」によって囲まれているのではないか。唯一信じられるのは私の「意識」だけなのか。しばらくは考えていたきたい。ただしあまり深刻になり過ぎないように、予め警告を発しておきます。



大峯山の山上ヶ岳(一七一九段)に建つ大峯山寺本堂は、間口が二三段奥行き一九段、高さが一三段の寄せ棟造り屋根は銅瓦および銅板葺き、と案内してある。運動場にもなりそうな広い広場に建つ本堂をみて私は、不思議でならなかった。こんな大きなものをどのようにして建てたのか?吉野から二〇数キロ、歩いて一〇時間余りもかかる山の上に、どうしてこんな寺を造ろうとしたのだろうか。伝説の行者である役行者が創建したという七世紀末とはいったいどんな時代なのか?疑問は尽きない。

水も乏しく生活するには、あまりにも不便な山上にどうしてお堂を建てようとしたのか。最初は山小屋ぐらいの大きさだったようで、幾度も火災にあったが、行基などの僧によって再建されるたびに大きく立派なものになったという。

六世紀に仏教が伝来してからおよそ百年後に日本古来の山岳信仰と仏教が結びついた神仏習合が修験道につながったと記憶するが、どうしてかくも険しい山上に造らねばならなかったのか、また後の人達が営々と守り続けてきたのか。

大峯山寺の敷地は岩を削ったように固い地盤であるが広く平らになっている。山の頂だから水平な広い頂ではなかつ

たに違いない。岩だらけの頂を人の手で削り広げたのだろうか。

小屋を建てても多くの木材や人手がいる。役の行者一人では出来ない。多くの人の協力が要ったはずだ。そのような状況を生み出す時代背景とはどのようなものだったのか。

私は、誰もいない雪舞う大峯山寺を見ながら大きな疑問を感じながら、時代を超えたロマンを想像した。

飛鳥・奈良時代には、吉野から本宮までの八〇キロに及ぶ山の稜線道は今よりもつと人々が行き交う道であったのではないかと想像している。

今では、大峯・奥駈道と呼ばれ修験道の行者道となっているが、昔は多くの人が本宮と吉野を往來するために大峯の尾根道を使っていたのではないかと想像している。

山奥の村で生まれ育った私は、小さい時から裏山で遊び尾根伝いに歩いた経験から思うのであるが、谷筋の道は水害によって道が寸断されることが多いが、尾根道はそのようなことがない。確かに岩や崖など部分的には困難なところもあるが蔓などで橋や階段を造れば通れる。

今でも、早い人は二十四時間で吉野から本宮まで夜通し歩いている。二日や三日ぐらいで歩いている人は幾人もいる。昔の人の体力では二日ぐらいで歩いていたのではないかと想像する。

確かに一般の女子供が歩いたかは疑問

だが、少なくとも若い男なら問題なく歩けたのではないかと想像する。

そのように考えると、単に修験道の道というよりもつと広く使われていたのではないかと想像である。

そのように想像すれば、山上ヶ岳に蔵王権現を祀る寺を建てたとしても納得できる。多くの人が往來し寺の前で蔵王権現に旅の無事を祈り幾ばくかのお供えをする。寺の維持にも協力する人の輪ができていたのではないかと。

もちろん、修験者も多く行き来したことは確かだろうが、単に修行ということだけではないように思えてならない。多くの人を険しい尾根道を歩かせる動機になるものが一体何だったかという疑問である。

若狭と京の都をつないだ鯖街道のように交易の道と同じではないにしても、何かのご利益があったと勘繰るのは不謹慎だろうか。

聖徳太子が遣隋使を派遣し仏教と神道を厚く信仰し興隆した時代だから、修験者たちもイケイケどんどんで数も多くなり行列が出来るほど大峯の山々も人で溢れていたのだろうか。

それだけ多くの人が、すべて悟りを得たわけではないだろうが、山を下りて人々に山の険しさ素晴らしさを語ったのだろう。今のテーマパークみたいなものだといえは言いすぎかな。こんな想像を私は寒い本堂の前でしたのである。

さあ、テント場へ急がなくてはならない。

大人の今昔物語 (41)

石川 吾郎

今回は、貴族の風変わりな引越しまつわる話です。アニメ「となりのトトロ」に登場してくる、煤わたりなどは、ここに登場する妖怪の子孫ではないかと、私は思っています。教科書に出ない度は、二／五。

三善清行の宰相、引越しをすること

(巻第七 第三話)

今は昔、宰相・三善清行という人がいた。世に善宰相いわれるのがこの人だ。浄藏大徳の父である。万事に通曉した高貴な人物であった。また陰陽道の方面までに通じていた。

あるとき、五条堀川の辺りに、荒れ果てた古い邸宅があった。縁起の悪い家との評判で、長らく人の住まないままに放置されていた。善宰相、家に困っていたので、この家を買って、日柄の良い日を選んで家渡りをしようとしたが、近親の者たちはこの事情を聞きつけて「よりによって縁起の悪い家に引越しをしようとするのは、やめたがよい」と、制止したが、善宰相は聞き入れず、十月の二十日ころに、縁起の良い日を選んで、引越しをしたが、これは普通の引越しのようではなく、午後六時(酉の時)ころに、宰相が車に乗って畳一枚だけを持って、その家に行ったのだった。

行き着いてみれば、五間ばかりの標準

的な寝殿があった。家の様子はいつに建てられたか分からぬほど古びている。庭には大きな松の木や楓、桜、常緑樹などが生い茂っていた。木々は大きく成長して木精も住んでいそうだった。紅葉したツタが這いかかっている。地面は苔むし、いつ掃かれたかわからないほど。

宰相は寝殿に上がって、中の橋隠しの間の部を上げさせてみると、襖は破れ果てている。放出の方の板敷きをかけ直させて、持たせてきた畳を中央の間に敷いて、火を灯させ、この畳に南向きに宰相はすわる。車は車宿りに引き入れ、雑色と牛飼いは、「明朝参れ」と言いつけて返した。

宰相、只一人南向きに眠っていると、真夜中になったと思われるころに、天井の格子棧の上で、何かさがさがと音がする。目をやると、格子の枠ごとに顔が見えている。しかもその顔が入れ替わっている。宰相、これを見ても騒がずにいる。するとやがてその顔は消えてしまう。またしばらくすると、南の庇の板敷きから、身の丈一尺(三十センチ)ほどの者たちが馬に乗って、西から東へ四五十人ばかり行進していく。宰相はこれを見たが、騒がずに落ち着いていた。

またしばらくすると、塗籠の戸を三尺ばかり引き開けて、女が一人いざり出てきた。その座った高さは三尺ばかりで、檜皮色の着物を着ている。髪は肩にかかるほどで、たいそう気高く清潔そう。ただよってくる

香りはえも言えず芳しい。麝香の香りでむせかえるほど。赤色の扇で顔を隠したその上から出ている額のようすは、白く清らかに見える。額の髪がねじれた風情で、目尻は長くのび、流し目で視線を送っているさまは不気味な中にも気品がある。鼻や口などが見えたらどれほど美しいかと想像される。宰相、じつと見つめていると、しばらくそのままでいて、再びいざりながら女が戻ろうとして、扇を顔から除ける。それを見るとその鼻が鮮やかに赤い。口の脇には四五寸ばかり、白銀で作ったような牙が食い違つて生えていた。

とんでもないヤツだと見るうちに、塗籠に入って戸を閉る。

宰相、これにも騒がずにいると、有明の月が極めて明るく、木立で暗い庭から、浅黄色(薄い青色)の上着と袴を着た翁が、落ち着いた様子で、文挟みに書類をもち、目の上に捧げもち、階段の元まで寄つてきて、跪く。

宰相が、声を上げ「何事を申す翁ぞ」と問うと、翁は、しわがれ振るえる小さな声で言うには「私めが年来住んでおりますこの屋敷に、あなたさまがこのように転宅をされられましたので、大きな嘆きと存じ、訴えを申し上げるために参りました次第。」

宰相、これに対して「汝の訴えは全く不当だ。その理由は、人が家を所有するために、正当な手続きを経るものだ。しかるに汝は、人が正當に所有すべきと

ころを、人を驚かし住めなくして、押し入って手にいれる。これは極めて非道である。実に鬼神というものは、道理にかたはらず理由があればこそ恐ろしいものだ。汝は必ず天罰を受けるだろう。さては他でもない、老いばれ狐が人を脅かすに相違ない。鷹や犬の一つでも連れてきていたら、食い殺してやろうものを。文句があるなら、しかとその根拠を示してみよ」

翁の言うには「おおせの事、弁解の余地はございません。ただ、昔から住み着いております屋敷でございますので、その事情を申し上げるものです。ただ人を脅すことは、この翁のすることではありませぬ。一人二人居ります子童部が、するな、との言いつけに反して、憚らずいついしてしまふ悪さでございます。かようにもおいでになりました上は、どうさせて頂きますか。世間にはめつたに空き家もございませんので、移り住もうにも家もございません。ただ大学寮の南門の東脇に、空き地がございます。お許しをいただき、そこに参りますのはいかがでしょうか。」

宰相、これに答えて「なるほど、結構なことだ。早々に他の者もみな引き連れて、そこへ移れ」という。

そのとき、この翁が声高く答えるに合せて、四五十人ばかりの聲が答える。夜が明けて宰相の家の者たちが迎えに来ると、宰相は家に帰った。その後この家を造営し、通常のごとく引越しをし

た。以降、住んでいて恐ろしいようなことは全くなかった。

こんな訳で、賢く知識豊富な人物には、鬼であつても悪事は起こせないものなのだ。思慮のない愚かな人が、鬼に脅されるものなのであると、伝えられていることだ。

《コメント》

この話にいくつか登場する幻覚のような妖怪たちのイメージは、鮮明で生き生きしています。天井の格子の一マスごとに顔がでてきて、それがめまぐるしく変わる、というイメージは強烈で私は、昔見たジャン・コクトーの映画「美女と野獣」の城の中の不思議な光景を思い出しました。

善宰相が南向きに座つたり寝たりするのが強調されているのは、この家の主であることを強調しているのか、または呪術的な意味があるのだろうかと思像したりします。

この話しの面白いところは、善宰相が展開する所有についての現世的理論に、妖怪が論破されてしまい、権力者に嘆願までする、というところではないでしょうか。この話しの妖怪は、現世の論理の通じる世界に生息しているといえるようです。

なお、塗籠とは、寝殿造りの建物の、中心部の寝室などに当てられる部分を指します。

我がおくのほそ道の旅 (12)

成瀬 和之

道を進むにつれて、しだいに白根が岳（白山）の姿が消え、代わつて比那が嵩（日野山、福井県武生市）が現れてきた。あさむづの橋（福井市）を渡り、玉江（福井市）に来ると、古歌に知られた蘆は穂が出てしまつていた。さらに、鶯の関を通り、湯尾峠を越えて、燈が城に出た。帰山（海路山、福井県南越前町）では初雁の声を聞き、十四日の夕暮れ、敦賀の港に着いて宿をとつた。

その夜の月は、ことさら晴れて美しかった。「明日の十五夜もこうでしようかねえ」と尋ねると、宿の主人は、「北陸の天気は変わりやすいものですから、明日の晩が晴れるか曇るか、やはり、わかりかねますなあ」という返事である。主人に勧められるままに酒を飲み、その後で氣比神宮に参拝した。

当社は仲哀天皇を祭る御廟である。境内は神々しく、松の木々の間からもれた月の光が射し込んでいます。その光景は、社前の白砂がまるで一面に霜を敷いたように見えた。

「昔、遊行二世の上人が、大願を思い立たれて、自分で草を刈り、土や石を運び、ぬかるみや水たまりの道を補修なさつたので、参拝者は往

来に困らなくなりました。それ以来、伝統の行事となつて今も絶えることなく、歴代の上人はみな、神前に砂を担いでお運びになります。これを『遊行の砂持ち』と申しております」と、宿の主人は語つた。

月清し遊行の持てる砂の上

社前の白砂を照らす月光の、なんと清らかで神々しいことか。歴代の遊行上人が手ずから運んで敷いた砂なのだ。

翌十五日は、やはり亭主の予想通り雨が降つた。

名月や北国日和定めなき

せつかくの中秋の名月なのに、変わりやすい北国（ほっこく）の天気の子で、雨とはがっかりだ。

「おくのほそ道（全角川ソフィア文庫）ギナーズ・クラシックス日本の古典参照

風雅の旅を締めくくる最後の景物、中秋の名月を愛でる地として選ばれた敦賀、敦賀着は八月一日（陽暦九月二七日）。ところが、翌一五日、中秋の名月の夜は雨になりました。

「おくのほそ道」の旅を、カッコよく締めくくりたかつたでしょう。旅に出ると思ひ通りにならないことも起こるものです。

そこで詠んだのが「名月や北国日和定めなき」です。

まず句の構造を見ると、「北国日和定め

なき」はつれない現実。「名月や」は、月は雨雲に隠れているのですから心の空にかかる名月です。この句も古池型の句、つまり、△現実△心の世界△の句です。

「定めなき」は表の意味は北国の天気のとりのめのなき、変わりやすさのことです。しかし、この「定めなき」には、これまでみてきた一笑・曾良などとの、さまざまな別れに対する芭蕉の感慨が込められています。日和のことを言いながら、そこには定めなき人の世に対する芭蕉の嘆きの声がひそんでいるのです。（NHK 100分（全）名著「おくのほそ道」松尾芭蕉、長谷川權著参照）

「おくのほそ道」の冒頭にあるように「日々旅にして、旅を栖とす」る芭蕉にとつて「旅は人生」であり、「人生は旅」でした。そんな芭蕉ならではの句と云えるのではないのでしょうか。

なお、「あさむづの橋」は、古くから文学作品に登場し、『枕草子』六一段にも「橋は、あさむづの橋」と、第一番目に紹介されています。「湯尾峠」も「燈ヶ城」も、源平争乱の時代に、木曾義仲が陣地を構えた古戦場です。芭蕉の、義仲に寄せる思慕は常時消えることがありませんでした。遊行一世の上人は時宗の開祖、一遍です。一遍によつてはじまった踊念仏は、出雲大社の巫女であつた阿国によつて演劇的要素を付加され、歌舞伎踊にとりいれられていきます。

また、仲哀天皇は、神話時代の第一四

B級サラリーマン渡世譚 (54)

明石 幸次郎

それぞれの役割・韓国編

明石は、A杉課長とM居の会話を聞いていて、工場の立場で考えていた営業の役割は、当事者となった今、クリアーに分かって来た様な気がして来た。

それは、適正価格、数量、納期、仕様を適時に、それも明解に決めることと、同時に工場側の対応も考慮しながら、客先と上手く交渉する事で、客先も自社工場も満足させることに繋がると確信した。

又、明石は今回急遽、自分を出張させる目的は、図らずも、余地があるかないかが、明確になっていない五パーセント以上の値上げを行って来い、ということであって、それは、M居が今まで交渉をして来た未解決部分をはっきりさせることであると勝手に考えた。

二人の会話の続きとして、M商事に要求した注文書が正式か仮か、であるのかは、M居は、「バンングラの入札を政策的に無理しても取るとなれば、その原資を韓国の値上げ分から回す。この方針であれば、五パーセント値上げは仮注文書であり、後の値上げ分をどうするかは、先程言いましたように、S田専務に鄭さんに電話で申し入れて貰ったらどうですか？」と繰り返した。

それに対し、A杉課長は「Mちゃん、それは、無理があるんと違うか？専務が

韓国向けの商談に今まで絡んで、話をつけられたことは、無いやないか？少なくとも、K田軍団のワシらは、部長までで、

決着させてるやないか！専務が鄭さんに値上げを申し入れて断られたら、専務の立場がないし、このタイミングで、専務に申し入れを依頼するのは、しんどいで！逆に、俺は、M商事のI田さんに強く申し入れて、ソウル駐在員のI藤を再度動かせば、何とかなるんと違うか！その駄目押しで、I田さんと明石をソウルに行かせばエエやないか！」と冷淡な目をM居に向けて言った。

M居は「まあ、A杉さんにお任せしますわ！」と何か第三者的な、投槍とも取れるような態度で答えた。

A杉課長は「おい、明石、お前、パスポートは持っているやろなあ。来週の半ばから、二泊三日で、ソウルに行つて来い！エエか？」と明石に向つて命令口調で言った。

明石は、この元商社マンのおっさん、何を偉そうに言うのや！もう少し、上司命令であれば、出張の目的と役割、責任をはっきり伝えんか！と急に腹が立つてきて、その気持ちが抑えきれず、「パスポートは、幸い持ってますが、私の今回の出張の目的は、今の話をお聞きしていたら、ただ、M商事に同行して、交渉は全て、任せておけばよいのですか？もし、それで値上げ出来なくても、私の責任はないのですね！」と言ったら、A杉課長

は、「お前、言うなあ。済まん！明石、何とか、お前の大学の先輩のI田さんを手く使い、話し合つて、お前がメーカーの立場でD工業の輸入課長に対し、再交渉して値上げを説得せえ。こいつは、英語が出けるから、通訳は要らん。もし、難しいようであれば、I田さんに英語で話して貰え！ただ、I田さんの英語はアメリカ英語やから、韓国の連中には、分からんかもしれんわ。お前がブロークンでもええから、英語で喋れ、経験やで！分かったか？」と、即座に悪かったと思つたのか、今度は、丁寧な明石の役割と目的を説明した。

それを聞いて明石は、素直に「分かりました。しかし、M居さんが五月に行かれて交渉された結果が五パーセントの値上げをのんだ相手に、再交渉して更に最低でも二パーセントの値上げを認めさせるのは、大変難しいと思いますが、それこそ、鄭常務を説得しないと、輸入課長レベルでは、交渉にならないのではないのでしょうか？鄭さんに顔の利く人は、S田専務以外はおられないのですか？」と率直に疑問をぶつけると、「お前のいう事は、尤もや！K田部長に相談しよう。まず、韓国をかたづけよう。N川、お前を呼んだが、バンングラは後にしよう」となつて、四人は打ち合わせ室から出た。

A杉課長は、明石を連れて、K田部長の席に行き「部長、ちよつとご相談です。エエですか？例の韓国の件ですが、納期



代天皇で、その皇后は「三韓征伐」で有名な神功皇后です。神功皇后については、『日本書記』が後の概念に従って皇后を「摂政」と捉え、一巻を載せて天皇に準じた扱い方をしています。『日本書記』によれば、神功皇后は執政六九年にして百歳で死んでいます。仲哀天皇と神功皇后の間にもうけられたのが第一五代応神天皇で、『日本書記に』よれば百十歳、『古事記』では百三十歳で崩じたとされています。『万世一系の天皇』とか、「神社の由来」などというのは、「神の物語」＝「神話」であることがよくわかります。

氣比神宮は越前の国一の宮（最も社格の高い神社）として名高く、大鳥居は国の重要文化財に指定されています。入り口に「北陸道総鎮守」の石柱が立っています。今でこそ北陸自動車道で敦賀インターを降りればすぐですが、都から佐渡越後に流刑になった古の人々にとつては「畿内」に別れを告げ「北陸道」に入る感慨深い場所であったのだらうとこの石柱を見ながら当時に思いをはせました。

つて来た。

K田部長は受話器を取ると落ち着いた声で「鄭常務、お久しぶりです。K田です。

お元氣そうですね。先日、貴方から弊社
のS田の所にお怒りの電話を頂いて、私
も申し訳ないと思ひ、部長としての責任
を感じました。それで、直ぐにM居を担
当から外し、今度、工場の資材課に居た
明石と言う若い者に変えました。早速、

明石が昨日、宇都宮工場に行き、常務の
言われた納期に間に合わせるように話を
つけて来ましたよ。貴方が言われた納期
は守りますので、安心して下さい。それ
で、納期を守る為に社内部品をお宅に回
させたこともあり、かなり国内販売会社
に完成品の納期遅れが生じる恐れが出て
来ます。その対策費を宇都宮工場から
と国内営業部長からも言われてまして、
私もそれで頭を痛めています。それで、鄭
常にご協力をと思ひ、ご相談を兼てお電
話した次第です」と、ボールを相手に投
げた。

これには、A杉課長も明石も、K田部
長の自作自演の名役者ぶりの話には、た
だただ感心して、耳を傾けていた。

オクラの山たより (16)

困生

もう今までは書店でさっぱり見かけな
くなつたが五十年近く前には高校生向け
にかなりしつかりした古典の参考書が出
版されていた。筆者も少しばかり御世話
になつた小西甚一の「古文研究法」とい
つた総合的な参考書は文庫本という形だ
が、確かに今でも出版されている。しか
し、「徒然草」とか「源氏物語」とか個別
の作品の注釈書のような参考書、それも
ハードカバーで五百ページほどの本とな
ると高校生向けの参考書売り場ではまず
並んでいない。ちよつとタネをあかせば、
この文章を書くのに重宝しているのもそ
うした参考書の一冊である。昭和二十七
年(一九六二)に〇社から発行された「評
釈枕草子」。筆者は田中重太郎。「枕草子」
研究ではかなり知られた人である。本の
装丁はしつかりしており、黄ばみがわず
かに見えるがチラチラと時折のぞくのに
何の不自由もない。筆者のようなものぐ
さには便利な本である。

さて、その田中重太郎氏が一九七二年
に「枕草子全注釈」というかなり大部の
労作を出版され、その中で田中重太郎氏
は清少納言の母性欠如について言及され
ている。清少納言は「母性的ではない」
とか「母としての愛情に欠けていたのだ
はないか」と、あちこちで問題視されて
いるといわれるのである。

根拠がないわけではない。たとえば、第
二十六段「にくきもの」である。

にくきもの。……もの聞かむと思ふ
ほどに泣くち。……あからさまに
来たる子ども、童を見入れ、らうた
がりて、をかしき物取らせなどする
に、ならひて、常に居入りて、調度
うち散らしぬる、いとにくし。

にくらしいもの。……人の話を聞こう
としている時に泣き出す赤ちゃん。……
ちよつと顔を出した子どもたちを
かわいがつてやり、喜ぶ物をやつたり
したところ、それに味をしめて、しよ
つちゅうやつて来ては我がもの顔に
上がり込んで、部屋に置いてあつた手
廻りの品々を散らかしたりするのは、
とても憎たらしい。

確かに「枕草子」には、泣く子を嫌つ
たり、童に対して批判的であつたりとい
つた記述が多い。歯切れのいい文章だけ
に母性の欠如が際立つのである。とは
いえ、清少納言は本当に母性が欠如して
いたのだろうか。田辺聖子氏は「作家お
よび女の直感」と保留をしながらも「清
少納言は子どもを産んだことはない」と
言われるが、筆者にはよく分からない。
今はさまざまな史料の示すとおり何人か
の子どもを持つ母親であつたらうと推察
している。

はたして彼女は母親としての役割をは
たさなかつたのだろうか。泣いている子
をやかましいと感じるのは特別おかしな
感情ではない。それをストレートに書い



は明石が昨日、宇都宮工場と話をして、
何とか韓国側の要求に応じることが出来
ました。後は、バングラの落札するため
の原資確保の絡みで、何んとか、D工業
に数パーセントでも値上げを認めさせ、
其処から原資を確保して回さないと、バ
ングラは取つても赤字になります。何か
エエ方策はありませんか？」と問いかけ
るとK田部長は「君ら、まあ、座れと、
広い机の前にある椅子に座るように言っ
てから「A杉さん、具体的に何パーセン
トや？上げなアカンのや？」と笑いなが
ら問うた。
「そうですね。最低二パーセントです
か？約六〇〇万円以上です」と答えた。
「そうか、それであれば、五パーセント
をまず、提示しないとだめやなあ。それ
で、俺が、それを鄭さん申し入れたらエ
工事やなあ。根回しやなあ！分かつた。
直ぐに、韓国に電話を掛けてくれ！」と
即座に行動に移した。その即断的な対応
に明石は感心して、この部長はA級サラ
リーマンで、徒者ではないなあと思つて
しまった。
A杉課長は、部長席の電話からKDD
を通じて、韓国の鄭常務にパーセントウ
パーソンを指定して、電話番号を伝えた
(相手を指定して、もし相手が居なけれ
ば、後で又、掛け直すと言う国際電話特
有のやり方)そして、受話器を置くと、
折り返し直ぐにKDDから「韓国の鄭さ
んが出られました」と言つて電話が掛か

たからといって母親失格とか母性欠如とすぐにレッテルを貼るのはどうであらうか。そもそも平安朝の母と子の関係は、特に貴族層のそれは現代とはまったく違う。すでに触れたことがあるのだが、「乳母」というものがそこには介在する。少しこの乳母というものにふれてみたい。

苦しげなるもの。夜泣きといふわざするちこの乳母（つらそうなもの。夜泣きといふことをする赤ん坊の乳母。）一五一段
胸つぶるるもの。……もの言はぬちこの泣き入りて、乳も飲まず、乳母の抱くにもやまで、久しき。（胸のドキドキするもの。……口のきけない赤ん坊がひどく泣いて、乳も飲まず、乳母が抱いても泣き止まないで、いつまでも泣くとき、どうしたのかなとひやひやする。）一四五段
赤ん坊が夜泣きをしたり、泣いてばかりしたりしていると本当に心配で、どうしてよいか途方に暮れるものである。子どもが泣き止まず、どうしてよいかかわからずオロオロしているさまは昔と変わらぬ親の姿と言いたいところであるが、清少納言の時代は違う。赤ん坊を抱いたり乳を飲ませたりするのは母親ではなくて、乳母なのである。母親だったはずの清少納言が「夜泣きといふわざするち」とまったく傍観者のように書いているのも彼女自身は赤ん坊を抱っこしてあやしたことはないからである。

天皇の子どもの養育を行う乳母は古代から存在する。この乳母が一般的な貴族にも広まるのは平安時代も中期の頃らしい。平安初期の文学作品には乳母がほとんど現れないが、中期になるとあらゆるジャンルに登場してくる。実生活での乳母の定着を反映したものである。十世紀から十一世紀になると乳母が重要な存在となり、地位も高くなった。もちろん、天皇の乳母の地位も向上した。八世紀の天皇の乳母たちは養育した親王が即位すると位が与えられたが、高くて五位程度であった。ところが、十世紀頃となると天皇の即位と同時に三位を与えられ宮中に勤める女官（国家公務員である）の中の次官である、典侍となるのが普通となった。長官の尚侍は当時たいてい天皇の妻妾の一人であったから典侍は実質的な女官のトップとなり、後宮の中で大きな力を持つて政治的な人事権にまで介入することさえした。位が与えられ政治的な力を発揮するのは天皇の乳母だけではない。寛和二年（九八六）の立皇太后に際して皇太后の乳母であった女性二人が従五位下に叙されている。皇后・皇太后になりうるのは摂関家の女性たちだけであったから、摂関家の子どもの養育を担当した乳母もまた力を持つようになったのである。

なぜ、この時期に乳母が急速に定着したのか。それは天皇家や摂関家の妻たちの出産と関係があったらしい。山本高次

郎氏の「母乳」（岩波新書、一九八三）によると母乳を与えている間は次の妊娠が抑制されるといふ。つまり、母乳を与えていない女性は次の妊娠時期が早くなる。これが科学的に証明されているそうである。平安時代にこのような科学的知識があったわけではないが、おそらく多くの経験から知られていたのだろう。定子も含めて天皇の妻たちには子ども、なかでも男子の出産が強く求められていた。さらには子どもの死亡率も高かったから、できるだけたくさんの子どもの出産する必要がある。摂関家も同様である。そのため乳母を雇って授乳から養育までを任せたのである。上層階層に広がった乳母による子どもの養育は貴族層全体から富豪層へと拡大していったのではない。さらに、平安時代中期頃から始まる「摂関家」といった「イエ（家）」の確立により家父長である父権が強化され、その代行としての母権も重みを増すにつれ父母の代行者である乳母たちの力も増していったとは女性史家の説くところである。

この天皇家や摂関家の乳母にはどのような階層の女性になったのであるだろうか。天皇家の乳母ですぐに分かるのは彰子中宮が寛弘五年（一〇〇八）に生んだ敦成親王（後の後一条天皇）の乳母たちである。七人いた。有名なのは「蜻蛉日記」の作者の孫、つまり道長の異母兄である道綱の娘である宰相の君こと豊子。夫は

讃岐守となった受領層である大江清通。寛弘五年というとき豊子は二十九歳、清通は五十三歳以上であった。もう一人例をあげると源高雅の妻である基子。夫は近江守も歴任しており受領層である。出自のはっきりしない乳母一人を除いて他の乳母の夫は六人ともすべて受領層である。つまり、敦成親王の七人の乳母はほとんど全員が清少納言と同じ受領階層であった。彼女も乳母たちの境遇をうらやましく思ったに違いない。

うらやましげなるもの。……内、東宮の御乳母。上の女房の、御方々いづこもおぼつかみならず、まゐりかよふ。（うらやましくみえるもの。……天皇や皇太子の御乳母。天皇お付きの女房で、方々の後宮のどこでも親しくお目通りを許されている人。）一五三段

天皇や皇太子の御乳母、天皇付きの女房は清少納言にとつてとてもうらやましい存在であったろう。勢力があつて内裏の中を肩で風を切るように我がもの顔で出入りし、威張っていたに違いない。清少納言に限らず天皇の御乳母になることは受領層の娘たちに共通する憧れの職だった。

十一世紀の半ば過ぎであるが、「更級日記」の作者が長年の間、天照御神をお祈り申し上げよと風に見えた夢は「人の御乳母して、内わたりにおり、帝・后の御陰にかくるべきさま（高貴な人の御乳母にとつて、帝や后の御恩顧に浴するはずだという

こと」だとばかり夢占いの人も判断したが、そのことは一つとして叶わなかった、と述懐している。受領層の女子たちにとつては、天皇の乳母となつて内裏を我がもの顔で出入りすることは天照御神に祈つてもなりたい職だったのである。親王の乳母だけではなく、撰閑家の子どもの乳母たちも受領層の妻が多かった。

では、親王や撰閑家の子の乳母となつた受領層の妻たちが産んだ子どもたちの面倒を見るのは誰か。「更級日記」の作者にも乳母がついている。父の赴任先の上総国に母親は同行しなかったが、乳母がいたので不自由はなかったであろう。姉にも乳母がついていたので、受領層でも子ども一人ごとに乳母がついたらしい。その乳母の夫について「枕草子」の「かしこきものは」に面白い記述がある。

かしこきものは、乳母の夫こそあれ……受領の家なども、所につけたるおぼえわづらはしきものにしたれば、したり顔に、我が心地もいとよせありて、このやしなひたる子をもむげに我が物になして、女はされどあり、男児はつと立ちそひてうしろ見、いささかもかの御事にたがふ者をばつめたて、讒言し、あしけれど、これが世をば心に任せていふ人もなければ……いみじき面もちして、事行ひなす。

たいしたものといったら乳母の夫がまさにそうだ。……受領の家などでも

身分の高下はあつても、その家では触らぬ神に祟りなしといった周囲の扱いだから、得意げに自分でも信望が厚いと心得て、妻の乳をあげた子どもを自分一人だけのもののように振る舞つて、女の子の場合はそれでもよしとして、男の子の場合は、びつたりと付き添つて世話を焼き、少しでも若君の御意向にそむく者があれば、とがめ立てし、あしざまに告げ口をして、始末におえないだが、何しろ今をときめく乳母の夫君であるから、思うままに苦情を言う人もいないので、……えらそうな顔つきで人に指図したりする。

一八二段

清少納言がさんざんに非難している乳母の夫のありさまは、受領層が採用する乳母たちの階層をよく表している。つまり、ここに出てくる乳母の夫はその家の主人に仕える従者であろう。そして、従者を雇える階層で乳母という役割が生まれ、その乳母は従者の階層から出てくるということなのである。

撰閑・公卿層では受領層が家司となつて従者のように多くの奉仕をしているが、受領層では六位以下の中・下級官人がその従者であり、そこから乳母が決められるのである。乳母とその夫は、それぞれの階層においてより高い地位、より安定した生活環境を得るために妻は乳母となり、夫はそれを支援した。そこには臣従の関係が介在している。だからこそ主人の子どもを大切に世話する。つまり、平

安時代中期の貴族層とその周辺の人々にあつては授乳も含めた子どもの養育は単純に生母というには行かず、逆に子どもを産んだ母親が大切に育てるのは自分の子ではなく一段階上の階層の子どもたちなのである。

以上、乳母についてあれこれ述べたが、清少納言が自分の子を産んでも授乳等の養育はまずしていなかったということが理解していただけたと思う。

子育てが清少納言にとつて人生の中心テーマではなかったとすると、そもそも彼女は女性の理想的な人生のあり方をどう思っていたらうか。それをよく示すのが「生ひ先なく、まめやかに」(二十二段)である。

生ひ先なく、まめやかに、えせざいはひなど見てゐたらむ人は、あなづらはしく思はれて、なほ、さりぬべからむ人のむすめなどは、さしまじらはせ、世のありさまも見せならはせまほしう、内侍のすけなどにてしばしもあらせばや、とこそ、おぼゆれ。

平凡な結婚をして、前途に望みもなく、ただ一途に夫を愛し家庭を守つて、つまらぬささやかな家庭の幸福を夢見ている人は、私にはとても我慢できない軽蔑すべきものに思われることであつて、やはり、しかるべき身分の人の娘などは、宮中に女房として出仕させ、広く世の中というものを見せて、場慣れさせたいし、できれば、典侍と

いった身分にしばらくの間でもつかせてみたいと、思われることだ。

「宮仕え礼賛論」といつてもよい発言であり、キャリア志向を持つ現代女性の発言かと思うような内容である。当時の書き残された資料としては珍しいものであるが、宮仕えを経験した女性の心理をよく示しているのではなからうか。ただし、清少納言の発言はまだ続く。

上などにいひて、かしづき据多たらむに、心にくからずおぼえむ、ことわりなれど、また内裏の典侍などいひて、をりをり内裏にまゐり、祭の使などにいでたるも、面だたしからずやはある。さてこもりあたるは、まいてめでたし。受領の、五節出ですをりなど、いとひなび、言ひ知らぬことなど、人に問ひ聞きなどは、せじかし。心にくきものなり。

(宮仕えの経験のある人を、奥様などと呼んで大切に遇するような場合、宮中で働いていたために顔がよく知られているような前歴がマズイと夫が思うのはもつともだが、しかし、また宮中の典侍などであつて事ある時には参内したり、あるいは葬祭の使などで行列に加わつたりするのも、名譽あることではあるまいか。そんな身分を持つつつ家庭の主婦の座に納まりきっている人は一層すばらしい。受領が五節の舞姫をたてまつる時など、そういう妻であれば、まるで田舎者丸出しの、言うに足らないことを人にわざわざ聞いて恥をかきようなことはきつ

としないであろう。すばらしいことだ。この「生ひ先なく、まめやかに」を見る限り、清少納言の理想とする女性の生き方は次の通りであろう。

何も知らないウブな女性が、男の何たるかも知らずに平凡な結婚をして人妻になることは否定し、宮中に出仕して社会の様子や男女の仲の機微も実践的に学ぶのがよい。そして、そうした経験を経て「受領の北の方」になるのが「めでたい」とする。平凡な結婚を否定する一方で経済的に裕福であり、夫の赴任先には夫婦二人で田舎の人々に君臨できる。そんな受領の正妻こそが理想だというのである。

しかし、しかしである。この清少納言の理想は残念ながら時代の流れと逆行していたと言わざるを得ない。清少納言の時代は日本史上おそらく初めて「イエ（家父長制に基づく家族制度）」が成立しつつある時代だったのである。

実をいうと上層貴族層で女性が朝廷に出仕して仕事をするのが賤しいこととされたのは十世紀以降のことである。九世紀以前では女性が自分の出身階層や朝廷での仕事ぶりで位をもらうのが普通であった。夫婦で朝廷に出仕して各自の働きぶりで位をもらっていたのである。そのため、高級官僚の母ほど朝廷の中での重要な仕事に就き、かつ位も高いということがよくある。

しかし、仁寿元年（八五二）藤原氏が最初の摂政となった藤原良房の妻潔姫が

良房の家夫人（正妻）という理由で従三位に叙せられる。これが先例となり、以後、急速に天皇家・摂政・大臣の妻という名目での叙位が増加する。つまり、女性は母や妻という家族内の身分によって社会的にも公的にも認知されることが多くなった。とすると当然のことながら自分が叙位される人の母や妻になることが人々の憧れとなる。こうして女房として出仕することに対する賤視が成立し始める。ただし、平安中期はまだそうした流れができあがって行く途中であり、朝廷や摂関家などの上級貴族の家に女房として出仕することは見聞を広め社会に通曉する一つの方法として考えられており、先ほどの「枕草子」の内容にその事が反映されているといえよう。

妻への憧れは紫式部にもチラリとではあるが、見える記述がある。「紫式部日記」寛弘五年（一〇〇八）十一月十七日の記事である。敦成親王を出産した彰子中宮が一条院内裏に帰った夜の事。長い儀式でうんざりして冷えきった着物を脱いで横になっていると、多くの貴族たちが声をかけていく。有難迷惑というもの。ましてや「明日早く出直して参りましょう。今晩は寒くて我慢ができません。身も凍ります。」などと言って、それぞれ自分の家に帰って行くのは本当にどうかと思う。それで、ふと「なにばかりのさと人ぞは（家にはどれほど結構な奥様が待っているというのかしらね）」という思いがわきつつ

後ろ姿を見送ったという。この箇所を読むと、紫式部自身の内面的な面もあわさって、きわめて湿っぽい感じもある。「早朝早く来ますよ。今夜は寒いから」と言い訳をして家路を急ぐ男たち、それを家で待っている妻たち。つい憎まれ口を心でたたいてしまふ式部。家の女主人として夫を待つ妻への憧憬がここには微かに見える。

実をいうと紫式部は幸福な結婚生活を送ってはいない。彼女は二十七歳のころに右衛門権佐兼山城守であった、つまり受領層の藤原宣孝と結婚する。この夫はすでに四十五歳以上であったと推測されしかもすでに三人の妻を持っていた。式部が結婚したとき他の妻が生存していたかどうかは不明だが、式部の歌などから夫の宣孝が彼女のもとに通っていたらしい。この結婚生活はわずか二年半で終わった。一人娘の賢子が産まれた翌年には夫の訪れはまれとなり、その年のうちに宣孝は亡くなった。四十九歳であった。賢く、洞察力の鋭い式部は男性には近づきにくく、一方で、軽率でがさつ、おまけに派手好みだった宣孝とは性格が余りにも合わなかったはず、と平安文学の専門家はいう。

女房として朝廷に出仕し官廷社会の事情に詳しくなり、さらに受領の妻になったとしても幸福になるとは限らなかつたのである。

【補足】

◇ 古代の女官たち

鳥取市国府町の無量光寺の裏山に八世紀初め、文武天皇に仕えた女官の墓がある。墓の主は伊福吉部徳足比売臣（？）七〇八）。墓といっても盛り土は跡形もなく円形の穴のあいた方形の石がゴロンところがっているだけであるが、墓跡からは因幡国の国府跡がある平野が見渡せる。平野を見守るように築かれた徳足の墓跡からは在地の人々の思いが伝わるようである。地方や一族の人々の期待をになつて遙か飛鳥の地に旅立ち、働きを賞せられて位階を与えられた女官が故郷の地でいかに尊敬と誇りの念をもつて遇されたかがよく分かるのである。

墓石に彫られた円形の穴には徳足の火葬骨が納められた骨蔵器には「因幡国法美郡伊福吉部徳足比売臣、藤原の宮に天の下知ろしめしし大行天皇の御代、慶雲四年歲次丁未春二月二十五日、従七位下を賜り仕え奉る」と書かれている。「続日本紀」慶雲四年（七〇七）二月甲午条には成選（めざましい働きをしたと選ぶ）の人等に天皇自らが大極殿で位を授けたという記事がある。二月甲午は二月二十五日のこと。徳足はこの日に藤原宮で従七位下の位記を授けられた。天にも昇る気持ちがあったことだろう。

さて、天皇と皇后とが内裏の中にもに住むようになるのは桓武天皇の父である光仁天皇以後のことであり、后妃たちが帝の寵愛を競い合う後宮が確立したのは嵯峨天皇の皇后であった橘嘉智子の時代

であった。たとえば、聖武天皇の皇后である藤原安宿媛（光明皇后）は平城宮の外に皇后宮を営み住んでいた。今の法華寺のあたりである。その後、皇后宮は転々とするが光明皇后が内裏内に住んだことはない。

大雑把に言えば奈良時代までは男女ともに天皇直属の職員は存在していた。たとえば、内侍司は天皇に常に侍し、奏請と宣伝を行うことが役割であった。奏請とは男性の官人の意見を天皇に伝え天皇の判断を請うことであり、宣伝とは天皇の意志を関係諸機関に口頭で伝えることである。長官は尚侍、次官は典侍、三等官は掌侍といわれたのは後の時代と同じである。内侍は吐納を掌った。吐納とは、天皇の言葉を「吐い」、官人たちの奏を「納す」という意味で「宣伝」「奏請」の言い換えである。

当然のことながら吐納にあつては天皇と官僚の間にあつて公平な立場こそが理想であった。そうしたことをやりきった理想的な女官として絶賛されたのは孝謙天皇から桓武天皇に至るまで重用された和気清麻呂の姉、和気広虫（七三〇〜七九九）である。

逆に最悪の評判を得たのは藤原薬子（？〜八一〇）である。「御言にあらぬことを御言といひつつ、褒め貶すことに任せて」（『日本後紀』弘仁元年九月丁未条）と正史にある。「宣伝」「奏請」を掌っているのはいかに、天皇の命でない命であるといつわり、官僚たちを勝手に褒めたりおとしめたりして天皇に伝えるなど、やりたい放題だったというわけである。

また、蔵司という職掌もある。蔵司は天

皇の象徴である神璽、非常時に不破関、鈴鹿関、愛発関という三つの「関」を通過するのに必要な割符である関契などを管理していた。さらに関契は二〇人以上の兵士を動員するにも必要であった。要するに天皇権力の発動に関する重要なものを保管するのが、蔵司の職掌であったのである。そのため蔵司の長官である尚蔵の位階は高く正三位であった。三位は男子であれば大納言クラスであり大臣が目前の位階であった。他にも後宮十二司といわれたように十二の職掌に別れて最も地位の低い女孀まで含めると女官といわれた女性官人はおそらく三〇〇人以上であったろう。

この時期の女官の特色として氏女（地方豪族の氏を基盤として出仕した女性）や采女（各国において三郡から一郡の割合で選ばれて出仕した女性。郡司の一族であることが必須条件であった）といった形で全国から女官候補が集められたことである。氏女や采女たちは都に到着するとまず女孀という身分で働いていくこととなった。そして、本人の能力と運によって地位を上昇させた。因幡国から来た伊福吉部徳足はその例である。また女官の模範として絶賛を浴びた和気広虫は吉備国の地方豪族の出身であった。こうした全国から集められた氏女・采女の例は正倉院の文書や木簡といった史料にその記録が数多く残されている。

念のために一言すれば日本の古代の女官たちは隋唐帝国や朝鮮王朝の後宮女官とはちがいが皇帝や国王に隷属した側妾候補ではなかったものであり、バリバリのキャ

リアウーマンであったのである。

このキャリアウーマンたちが十世紀頃から官僚世界の表舞台から消え、天皇に仕える「上の女房」、中宮や皇后に仕える「キサキの女房」、撰関家に仕える「家の女房」となっていく過程を追求するのは我が国における家父長制の発生と「イエ」の成立という家族史・女性史の重要なテーマであるが、今はこれ以上ふれない。

撰関期ともなると女官たちの世界はかつての後宮十二司からはかなり縮小されてほぼ内侍司のみとなっていた。撰関期は朝廷内の権限をかなりの部分は男性に奪われながらも上東門院に頭が上がりなかつた藤原頼通に見るように、また「イエ」が未成立であったために「王威に似たり」（『小右記』長元四年の記事）というようにな中宮や皇后が独自の政治権力を持つていた時代であった。こうした時代であったからこそ清少納言や紫式部も一部とはいえ政治の表舞台に立つこともでき、その文学も緊張感のある社会的にも意味を持つようなものとなったのであろう。

女房たちによって書かれた文学作品は中世にもあるが、撰関期のような輝きは失われてしまう。仕えていた中宮や皇后が独自に政治力持つことがなくなったからにちがいない。

代名詞でしか表現できないもの、あるいはナシヨナリズム雑感

大江雉寛

かつて「一億総中流」という言葉がもてはやされたことがあった。いつ頃だったろう、調べたわけではないが社会科学の授業でも教えられた記憶があるので一九七〇年代には普及していた考え方かと思う。二〇一八年の現在において通用するしないはさておき、この言葉は長らく日本人の特徴として語られていた。それは全体の中に個人を埋没させる傾向が日本人の国民的特質として強かつたからだろう。資産に関する統計データを持ち出して明確に階級的線引きするわけではなく、そこでは意識のレベルで皆と一緒を良しとする価値観が強く働いている。

このところ、続けている普通をめぐる問題である。ここまでの流れを簡単に要約すると、前々回は普通なるものの輪郭は他者を意識した時にはじめて浮かび上がることを言い、前回は普通とは相対的自己認識の言い換えでもあるといったようなことを書いた。これを踏まえて、今回は「普通は時に攻撃性を帯びる」という話をしてみた。

一億層中流という言葉が歓迎されたのは、事実関係でどうこうではなく、言葉のニュアンスが日本人の心性を言い当てるものだったからである。「総」という形に括られることの安堵感、さらに括られる



場所が「中流」という可も無く不可もない居心地の良さ、ほとんどの日本人が「ああ、そっだろっね」と頷いたことだろう。ただ、意地悪く問い詰め始めると、すぐにボロは出てくる。たとえば「中流」とは何かを具体的に説明せよとか言い出すと、にわかにはややくしくなるとかの具合に。

「全体の中に個人を埋没させる」という言い回しについても、より厳密を求めるならば、自身を埋没させるに足る全体が必要になるわけで、その全体とは何かなどの面倒くさい議論になる。それに対する万人安堵の回答は、そんな問いかけは鶏が先か卵が先か的な話だといって切り捨てるのである。そしてカメレオンが自らを背景に溶け込ませるような具合に、絶妙の調和関係で全体と自己の折り合いをつけるでもいった感じでの、わかったような、わからないような説明あるいはごまかしをする。あえて定義的なことを言うにしても、ハナっから定義には馴染まない曖昧なものを思い描いておいて漠然と「それ」と代名詞で指し示す、そうして「それ」以上でも以下でもないという開き直ってしまうのである。

さて、ここからが普通をめぐる問題である。総中流という時の中流がそうであるように、普通もまた代名詞でしか説明できない。「ああ、何て言うんかな、そう、そんなもんだ、わかるだろ、それ、それだよ、それ」、まるで落語の一節でも聞かされているような説明にしかならない、

それが普通なるものである。世の中の多くの人は、中流に自らを置いて安心するとともに、自らを普通と呼んで折り合いを付けてきた。世の中が安定していて、

準じるべき価値観が疑われることのないうちは、こうした姿勢でも物事は滞りなく進められる。「普通どおりに振舞いなさい」や「もっと普通の格好しときなさい」といった言い回しも指導的なニュアンスで使われる。しかし、社会に綻びが目立ち始めると、規範だったものが束縛や抑圧に姿を変え、いたるところで動揺が起きる。そんな時、普通の側からの揺り戻しは起こるべくして起こる現象だが、問題はその揺り戻しに正当性が認められるかどうかである。「普通どおりに振る舞いなさい」や「もっと普通の格好しときなさい」に対する反抗でありがちのパターンは「これのどこが普通じゃないんだ」や「これでも普通だよ、みんなそうしてやるし」といった類いだろう。これは守旧サイドの普通と革新サイドの普通の衝突である。中身は違っても、普通と普通がぶつかり合っていることになる。こうしたケースは往々にして世代間ギャップと説明されるが、時には歴史を眺める長い目にも耐えうる、すなわち時代を動かす情動を孕むものもないわけではない。その種のアンチテーゼに対して、守旧サイドが頑なに代名詞でしか説明できない普通に固執しているとすれば、その普通は遠からず暴力的な色彩を帯びてくる。

要は普通に拘るにしても、普通の根拠が何かをはっきりと自覚できるか否かである。ところが、普通が相対的なものである以上、それ自体は自覚することも難しいし、ましてや明確な定義など最初から望むべくもない。そのため、普通であることが前提なしの出発点となってしまう、自分たちと同じ側にいない者に対して無自覚のうちに否定的な眼差しを向ける。そして、異物に対して注がれるのも似たその眼差しは自ずと対象の排除へと向かう。これが、普通が攻撃性をもつに至る状況である。場合によっては、後付け的な正当性が主張されることもあるのだが、多くの場合は頭ごなしの否定ないしは攻撃となる。

このように書き進めると、普通なるものに寄り添う気持ちはどこか宗教に通じているようにも思えてくる。どの宗教どの宗派というわけではないが、教義の本質を理解するでもなく宗教的行動をおこなっている人々はどこにでもいる。教えに帰依するあまり宗教的行動が日常化しているケースである。宗教に向き合うそうした姿勢はけっして批判すべきものではない。鰯の頭ではないが、信じることで得られる安寧は理詰めの解説や批判とは別のところに存在するからだ。しかし何かの機会に宗教的行動の意味が問われた時、十分に対応できないとすればどうだろうか。教義が空気のようになってしまうっていて教条主義的に受け入れている

場合は、混乱に陥るかさも無くば怒りだしたりするのではないだろうか。場合によつては積極的な排除の行動を取らせるかも知れない。普通をよりどころにするとは、大多数のなかに自身を埋没させる快楽を受け入れることであり、居心地の良いものである。それはまさに宗教的安寧と重なり合う。その安寧が脅かされた時には動揺もするし怒りも湧くが、それは外部からの圧力によって宗教世界の平穏さが破られた時のものと似ている。さらに言えば、宗教では教義が血肉となっていれば揺さぶりに対応でき、普通の問題では普通とは何かを立ち止まって思索できる余裕があるのなら、混乱や怒りのスパイラルに囚われることもないという点でも同じである。

ところで、ここまででは努めて一般論めかして書いてきたのだが、年表の上での具体的な出来事を引き合いするとどうだろう。立脚点次第で黒いカラスが白くなる歴史解釈の問題なので強く言うことはできないが、普通を求める心と排除の心が重なりあつたパターンを考えるにあたってはナシヨナリズムの問題は興味深い素材を提示してくれる。とりわけ幕末から維新初期にかけての日本のナシヨナリズムである。ナシヨナリズムの話を持ち出すにあたっては、ナシヨナリズムとはという定義に関する問題設定は避けられない。ところが、この設問は専門家の間でも見解が異なるという、一筋縄ではいかない。私

のごとき門外漢が口を挟むのも気が引けるが、とりあえずは家郷や同胞を大切に思う気持ちからスタートにして、国家という抽象概念で線引きした結果、境界線よりこちら側に優位性を認める感情といったぐらいにしておく。「国家」という抽象概念」や「線引き」などの曖昧なほかし方、あるいはその感情が個人のものか集団のものかなどツツコミどころが満載なのは重々承知である。しかし最初から厳密にしようとする必要もない。基本的な定義に関してはザル並みの扱いであることを告白したうえで幕末から維新初期の排外行動について考える。

嘉永七年（一八五四年）に日米和親条約が結ばれて以降、日本国内における外国人の活動は増加した。世の人の反応はというと、珍奇の眼差しを送ったり、銭もうけの好機と近づいてみたり、何となく怖れて距離を取ったりとさまざまである。そして中には積極的な攻撃性を示す一群もあった。刃傷沙汰に及んだ事件で有名なものは文久二年（一八六二年）の生麦事件だが、これは大名行列を乗馬のままやり過ぎた外国人が切りつけられたもので、同じ行為を日本人がおこなったとしても無礼討ち事案なのでナシヨナリズムの文脈では扱えない。ナシヨナリズムなるものを意識するのであれば、知名度が大きいわけではないが安政年間（一八五四〜一八六〇年）に発生している外国人襲撃事件や文久以降の公使

館放火（文久二年のイギリス公使館襲撃は高杉晋作が指揮して後の伊藤博文や井上馨らが直接行動に参加していたことで有名）である。問題はここに見られる攘夷外国人排除という行動を続きなしてナシヨナリズムに読み替えることが可能かどうかである。

ナシヨナリズムを明確な形をもった活動の上を探すなら、明治二年（一八八八年）の政教社結成はおそらく発生時期の最下限にあたるだろう。一般には国粹主義の流れを解説する文脈でその先駆けに位置づけられる事象である。現在、広く認識されている右翼的活動と明治時代の国粹主義とは必ずしも一致するわけではないし、明治二年時点での政教社が国粹を標榜していたわけでもない。それに、そもそもナシヨナリズムと国粹主義を同一視することにも慎重であらねばならない。ただ定義を曖昧にしたところから始めたとしても、延長線上で分かりやすい形を切り結ぶのが政教社の存在である。したがって明治二年の政教社と幕末・維新初期の排外活動の間をどう解釈するかが問題となってくる。政教社に集った面々（有名どころでは三宅雪嶺、杉浦重剛、志賀重昂ら）と幕末期に排外活動を積極的に行った人々の行動原理に重なるところがあるのか・ないのかという問いである。

政教社の面々にとっては政府が推進する欧化政策が批判対象だった。鹿鳴館に

象徴される軽薄な西洋讚美に対するアンチテーゼである。ただそれが批判の中心だったとしても、むやみやたらな西洋排撃を唱えるのではなかった。西洋的なものばかりに目を向けるのではなく、日本的なものや日本人の美質を大切にすべしとの主張が機関誌『日本人』誌上で行われていた。

これに比べると、幕末の排外活動は西洋人に対する無秩序な攻撃に見える。洋装の清人や日本人が殺害されるケースもあったので可能と見れば攻撃していたのかも知れない。組織だった行動でもやみくもさは同じである。高杉晋作らによる文久二年の英国公使館放火事件は、警備が手薄だったか否かに関係なく実行されたテロリズムであり、その延長線には長州藩による関門海峡の封鎖と下関戦争がやってくる。

排外姿勢の徹底ぶりに注目して二つを並べるなら、幕末の方がその度合いは著しい。だがそこから幕末の方がナシヨナリズムが強いという論調にスライドさせるのは慎重でありたい、というか結果的には明治のケースの方がよりナシヨナリズムの色彩が濃いように思える。というのは、政教社の場合には西洋（あるいは西洋に媚びる政策）を意識した結果に自国の価値を主張しているのに対して、幕末のケースは日本という国家意識がまだ希薄であるようだからである。昨年、新たに発見されたという坂本龍馬の書簡に

「新国家」という文言があった云々の話もあるが、国家という言葉が用いられていたか否かの問題ではなく、その概念をどのあたりまで具体的に捉えていたかである。横井小楠や佐久間象山など一握りのオピニオンリーダーの中には明確なイメージを持った人もいたろうが、大多数でみると、幕府に対する反感が皇室尊崇をかき立て、そこから直情的な排外行動が生まれていたのではないだろうか。

倒幕の原動力となった尊攘運動は、言うまでもなく尊皇思想と攘夷思想が重なり合ったものである。アンチヨコ的な概説書ではこれは黒船来航を契機に盛んになったとされている。だがその図式は短絡的であり、後期水戸学や国学などの母胎があったことは、少し詳しい解説書を紐解けばきちんと記されている。朱子学の一つである水戸学には華夷思想、国学には平田篤胤に至って提唱された復古神道があるので、尊攘運動には排他的な素地が前提段階から用意されていたには違いない。だがそうした排外性を源流にしていたとしても嘉永年間の黒船来航がいきなりナシヨナリズムと呼びうる運動を生んだのかどうかは疑問である。むしろナシヨナリズムとしての扱いは後付けの解釈ではないかと思っている。幕府の対外政策に対する反感が、直接的には皇室崇拜を強固にし間接的には外国人排斥となって現れた、その結果、カテゴリー的にはナシヨナリズムとも見える動きとな

ったのではないか。言い換えれば、幕府を強く意識するあまり、準じるべき規範としての皇室崇拜と攻撃すべき対象としての外国人が明確になったのではないかと考えるのである。

この構図では、行動主体を中心において時、攻撃相手は世俗権力の幕府であって外国人ではない。対立軸には宗教的権威の皇室が置かれ、幕府憎しの感情が強ければ強いほど皇室崇拜は増幅される仕組みである。なぜ皇室を尊ばないといけないのかの問いは存在しないし、日本人だからという民族主義（エスニック・ナショナリズム）も見られない。幕府への対抗心がすべての解答であり、外国人への攻撃は付加的政治的権威の代替品である。反幕府の直接行動は薩長同盟が締結されてようやく実効的な形をもつに到るが、それまではいくつものテロリズムが波状的・単発的に行われたにとどまり（祇園会の夜に京の町に放火して所司代を襲撃する組織の大規模テロの計画はあったが未遂）、池田屋事件）、十分に具体化しえない感情のはけ口として外国人襲撃が行われたことになる。

こうした形で解釈してみると、攘夷を強く唱えていた二大勢力の薩長両藩が下関戦争や薩英戦争の後で立ちどころに攘夷思想を翻したのも、ナショナリズム的なものが行動原理にまで醸成されていなかったからだろう。要するに、幕末の尊攘運動の段階では、将来的にナショナリズムとなつて現れる種は孕まれていたかも知れないが、厳

密な意味でのナショナリズムを指摘することとは難しいと考えるのである。

それでは明治になつて形を取り始める日本のナショナリズムはどこから立ち現れたのかと問うと、あからさまな排外活動（攘夷）を展開していた連中の中からではなく、外国人を何となく怖れ遠巻きにしていた普通の人々の間からなのではないだろうか。明治になつて「智識ヲ開キ才芸ヲ研ク」（京都新聞・明治五年一月）がスローガンのように唱えられても、新時代の空気が一朝一夕で世の中に浸透するわけではない。ぬるま湯のような普通に浸っていたのに、そのぬるま湯が浸食されていく不安に怯えつつあった少なからずの人々がいて、旧習に寄り添うそうした人々に対して外部から国家のイメージがリアルに突きつける事案が生じた時、ナショナリズムが形を取り始めたのではないだろうか。征韓論の形となつて現れる一連の対朝交渉や明治五年の琉球処分あるいは明治七年の台湾出兵などは外交のあり方や国境問題が具体的に論じられたという意味で、国家に関するイメージを刺激した事案だつたように思う。政府のトップあるいは外交交渉に当たった官僚クラスが抱いた国家像に近いものが庶民レベルまで広く共有されたわけではな

いだろうか、明治の一桁代後半というところの京都新聞のような新聞紙（活字メディア）が活動を盛んにしていた時期でもあるので、日本語圏を一括りにする共

同体意識は作られつつあったはずである。そうした雰囲気や背景を持ち上がった現実的な外交問題・国境問題は、多くの人々に国家とは国民とはを考えさせる契機になつたに違いない。そこから一〇年ほど経過した後、漠たる感情を言語化して理論的支柱を与えることになつたのが政教社の人々だつたのではないだろうか。

ナショナリズムをめぐる議論では、中国の義和団事件やインドの独立運動をモデルケースとして、西洋の帝国主義による抑圧とそれへの抵抗から生じてきた動きと説く流れがある。これはヨーロッパの近代国家が成立するにあつたのナポレオンによる大陸支配とそれへの抵抗という図式をアジアの事情に当てはめたものだろう。それをさらに日本に適用するならば、武力抵抗という点では幕末のテロリズムはナショナリズムの現れであるように見えなくもない。しかしかの攘夷運動は彼我の戦力差を目の当たりにして立ちどころに手のひらを返す程度のものであつた。ナショナリズムの議論に引きつけるにしても、その種というのが関の山であるように思う。むしろ庶民レベルで国家のイメージが形成されていく中で、寄り添う普通が揺さぶりを受けたことへの反作用としての攻撃性の方がナショナリズムと呼ぶに相応しく思うわけである。

*現代の京都新聞の前身である日出新聞とは別に、明治初期に刊行されていた新聞

孫ウオッチング（24）

福田 圭

十一月二十六日に「孫ウオッチング」に行くために、鳥取市のビジネスホテルを予約しようとしたら、いつもより宿泊代が倍で、しかも満室で予約できない。どういふことだ。鳥取市に向かう鳥取自動車道の道の駅「河原」の駐車場も、鳥取市内のコンビニの駐車場も満車である。鳥取砂丘へ向かう臨時のシャトルバスは二時間待ちという。何だこれは。十一月二十四日〜二十六日「ポケモンGO」の特別イベント「ポケモンGOサファリゾーン in 鳥取砂丘」が行われ、全国から愛호가詰め掛けていたのだ。砂丘の入り込み客数はゴールデンウィークを上回る勢いで、砂丘会館総務部の松永課長は「猛暑だった夏と台風が連続した秋の落ち込みを三日間で取り戻せそうなほど」とうれしい悲鳴をあげる。仕掛け人は「ウエルカニ」スタバはないがスタバはある」で有名な平井知事である。お陰で、道路は大渋滞である。予想を上回る人出に、県とゲーム運営会社は砂丘周辺の渋滞を緩和するためイベント対象エリアを県東部全域に拡大したが、「焼け石に水」である。宿を倉吉市に変更したが、孫と別れた後、倉吉に向かう国道九号線が砂丘帰りの客で大渋滞となりイベントのおおりを食らった。話し始めた二歳と二か月の光君（ペンネーム）は、お母さんのことを「タータン」、お父さんのことを「トーターン」、おじいちゃんを「ジーちゃん」と言えるようになり、ゾウさん、カバさん、ゴリラなど動物の名

前が得意である。おまま(と)で、野菜を上手に切る。

弟の誕生で、嫉妬もあるのか、ご飯を食べさせてもらったり、少し「赤ちゃん返り」をし、知らない子にボールを投げつけたり悪さをする。「第一反抗期」の始まりなのか？家の階段の上り下りもできるようになったのだが、図書館で借りた「大きなカブ」の絵本を手に持ったまま階段を降りようとして、二日前に階段から転落して、おでこにこぶを作った。病院で診てもらって、「幼児はCTなど取れないので様子を観察してください」とのこと。今のところ元気そうにしているの、一安心したが、冷や汗ものだった。いろんなことが起こる「孫ウオツチング」である。

十二月二十日から二十二日、息子夫婦が光君と葵君(いずれもペンネーム)を連れて大阪に帰ってきた。光君は言葉をほとんど憶え、「イカ」「タコ」「カニ」「エビ」がわかる。息子夫婦と葵君が用事で二階に上がっている間、一階の台所のおばあちゃんに「お父さん、二階、行こう」「お母さん、二階、行こう」と何度も誘いに来る。一語文、三語文が言えるようになり始めた。二十二日は、息子夫婦は光君を連れて十三方面へお散歩、おばあちゃんはフラワーアートの習い事に行ってしまった。お爺ちゃん、お母さんとお留守番。泣くのをあやし、寝てしまっただけとする。息子夫婦が帰った後は、布団のかたづけなど大変である。孫が来るのも「来てうれし、帰ってうれし」(曾おばあちゃん曰く)である。

連載「おつちよこチョイぼけ」(57)

—昭和女、どっこい日記—

壊れていく…の巻

九十一歳の母がいる私にとつて、「壊れていく…」という見出し、かなり不吉なのだが、ここは、母は関係ない。うちの家電各位のことだ。

まず、洗濯機がおかしなことをしやべりだした。「グオーン、グオーン」と普通に回っている状態の音から、突然、「グエーロ、グエーロ」とか言いだし、そのうちに「ガンガラ、ガンガラ、ガンガラ」とガタガタ語としか表現のしようがない音をたて続けるようになり、そのうちに歩き出すのではないかと思えるほど、本体がブルブル横揺れ(?)までして、私が「えっ、どうしたん? しつかりして! 私はアンタでええねんで。いや、アンタがええねん。買い替える気は毛頭、ないねんで」と言っただけでも、苦しそうにブルブルガタガタ震え、正常時とは違う大きな音で何か異常を訴え続け、ある日、電源を入れても、ウンともスンとも言わなくなった。「大往生」であった。

だって、いつ買ったのか思い出せないぐらい古い洗濯機だったのだ。親友のお兄さんが、家電マニアで自分のを買うだけでは飽き足らず、妹の友だちの分まで、いろいろ調べて「コレなんかどうですか? 値段も手ごろやし、大きさもちょうどいいと思っけ」と斡旋(タダで)

してくれた洗濯機だったのだ。

私はお兄さんの前ではちゃんと下の名前前で呼んでいたが(苗字が親友と同じだから)、親友といるときはいつも親友と同じように、「お兄ちゃん」と呼んでいた。だから、「お兄ちゃんの洗濯機」だといつも思ってた。フル稼働させてきた。掃除は嫌いだが、洗濯はそれほどキライではないもので。

お兄ちゃんの家電マニアの目は確かだ、洗濯機と同時に選んでもらったトースターも本当に長生きで、あまりにも古ぼけたのでとうとう処分したが、最後の一枚のパンもきれいに焼き上げ、「ごめんね、私が毎日、きれいに磨いていたら、まだまだ使えたのにね」と謝って捨てた。トースターは「壊れていく…」ではなく、「錆びていく…」汚れがこびりついていく…だった。

年末、唐突に冷蔵庫が「ブイーン」と大きな音をだし、「あれえ??」と思っただけで、異常事態に陥った。野菜室からホウレンソウを取り出したら、雪のような白いものがビニール袋のなかに積もっている。「雪? 凍っている?」。あわてて、中を見たら、お豆腐もパックのなかで凍り、コンニャクも、ニンジンも冷凍庫の中に入れてみたみたいでガシガシ。試しに包丁を入れてみたが、ニンジンなんて固くて切れない。完全に野菜室が冷凍室に変わってしまったのだ。洗濯機は本当に長い間使っていたので

(日立製だったので、日立の人が、『わが社のミュージアム、つまり社内博物館に展示したいので買わせていただきたい』と言いくるのではないかと思うぐらい古かった。)、諦めもついたが、冷蔵庫は洗濯機一台を使っている間に、三回ぐらい買い替えている。

最初に書かなかったが、お兄ちゃんは肝臓の病気で亡くなってしまい、お兄ちゃんの見たてではないせいか、どれも壊れるのが早かった。東芝とかシャープとか、当時としては一応確かな国産メーカーの冷蔵庫だったが、昨今、東芝もシャープもおかしなことになってしまっている。うちの冷蔵庫が早く壊れたからいうわけだが(すみません!)、確かな品質の家電をつくることに邁進していれば、よもや一部上場企業でなくなるとか、経営権を台湾企業に譲らざるを得なくなるといふ事態は避けられたのではないか。知らないけど。

しかし、家電史上、野菜室が勝手に冷凍室に変わるなんてことは絶対にはないはずだ。

掃除をして、どこかをいじった? いや、自慢ではないが、年末、私には冷蔵庫を掃除する時間なんか全然、なかった。だから、野菜を腐らせないように、冷蔵庫が勝手に付度して野菜室を冷凍室に変えてくれた?

後者はあり得る、と思う私が壊れているのか。それも怖い。というか、もつと

怖い。さらに怖い。一番怖い。

などと考えていた矢先、会社の納会が終わった翌日、納会メンバーの男性からメールをもらった。

納会といつても、社内でやるので、女性陣（といつても常時仕事をしている数名）が手分けして準備や後片付けをする。そのことをねぎらうメールだったのだが、「昨日はお疲れ様でした。…たまたま十一年前の日記を読み返していたら、その年の納会の料理はカニ鍋とブタしゃぶ。昔に比べると若干、力は抜けているんやなあと思いました。…それでも毎回大変ですよ。ありがとうございます」という文面で、私はひとり爆笑。というのは、料理はすべてケータリング。十五人で食べるので、Lサイズのパizza二枚、大きな丸いパックの握り寿司、それにオードブルとして盛られたコロッケやカラアゲなどなど。豪華っぽいのが、手抜き丸出し、安上がり系の納会だ。それらを食べ尽くすと、ポテトチップスやサイキカなんかをしがむ。

経理を担当している女史が自分のお金も始末なら、会社の経費関係にもシビアで、封筒一枚でも余分に使うなよ！というオーラを出しているタイプなのだ。「おもてなしのときは、少し余分に」と力なく言うのだが、「はあ？ いつも余っているじゃないですか！」と反論されてそれつきりになり、年々、会社の集まりはケチ臭く、しよぼくなつていつているのだ。

そこを指摘されて、私は大喜びで、返信しようとしたら、あれ？ 文字がおかしい。「うO E 4 H…」と文章にならないのだ。

ま、まさかのパソコンの故障？ 大みそかに修理の人など呼べるわけがないし、私も母の家に帰らないと、母が怒ってバクハツしてしまう。「う、うっそお」と私は懸命にパソコンのキーボードをあちこち叩いて、何とか修復を試みた。

会社の大事なスポンサーに手紙を送っていて、もし年明けにその返事が来て返信できなかつたら、非常にマズイことになる。もちろん、「芥川だより」もある！ どうしよう？ 焦りまくったが、手の施しようがないので、そのまま正月休みに入つて、五日、パソコンを立ち上げ、メールを打とうとしたらやつぱり「あ2E O…」と文章にならない。

そうだ、友だちのY子だ！ もう広島から帰ってきているはずだ。「あけまして」の挨拶もそこそこに、「メールがこうこうで」と言いかけたなら、「電源を完全に切つてみたよね？ コンセントから抜くという切り方で」と極めて冷静に教えてくれた。そうだった。初期設定に戻すんだつた。ところが、やつてみても同じ。「ああ、いよいよダメだ」とY子にもう一回、電話する。Y子はいいヤツだった。私の訴えを自分のパソコンで調べてくれていたらしく、「キーボードの上の方に、Nで始まるボタンがあるから、いっぺん押してみ」。

探したら、Num Lkというボタンがある。一回ポチッと押して、打ち込んでみたら、普通に「あけまして」と打てた！！！！

その瞬間に思い出した。年末、何かを取り出そうとして、国語辞典をパソコンの上に落としたことを。あのときに…。Y子に電話でペコペコお礼を言つて切つてから、私はしみじみ思つた。壊れていて、壊れているのは電気製品だけじゃないな。私自身もだいたい壊れちゃっているな。だましまし使うしかないな。

(AO)

埋め草

二〇一七年最後のビッグニュースは、今上天皇退位の日程が決まり、平成の終わりが確定したことだろう。来年の五月には次の元号になっているわけだが、新元号が決まるのは今年の夏頃だとか。その頃になると事前予想も盛り上がつてくるに違いない。とはいえ、候補の中から選ぶわけではないので的中させるのは至難の業だ。それに競馬予想じゃないんだから、仮に的中したとしてもエッヘンと自慢することにしかならない。そんなことは十二分に分かつてはいるが、それでもやはり一口噛んでみたい話題である。ルールはいくつかある。まず国民や国家の理想を表現するに相応しい二字の言葉で中国の古典に由来をもつこと。次に

読みやすく書きやすい、つまり平易であること。そして会社の名前などですでに使われている固有名詞と重ならないことなどである。もちろん、以前に使われたことのある元号や故人に捧げる称号(諡)はNGである。ここへもう一つ加えれば、アルファベット表記した際にM・T・S・Hから始まらないという条件も加わる。

これは書類等で略記する習慣が定着していることを鑑みて、明治・大正・昭和・平成との混乱を避けるのが目的らしい。さて、これらを踏まえたいうでの検討だが、まずは国民や国家の理想とはなんぞやといったところか。ただこれは極めて曖昧かつ抽象的なものの方がいいのだから、世界平和とか万民幸福とかに繋がるものならOKだろう。中国の古典に由来するという話は面倒そうな条件だが、二字熟語になる漢字というのなら他に探す場所はない。日本漢文など漢字を用いた他国の文献にあつたところ、それ自体の典故になつている漢籍があるに決まっているから、結局は中国の古典に行き着く。ただし、理想を表現するような言葉だから、四書五経をはじめとした儒教の文献を中心に探すことになる。

一応の確認作業として、過去の元号とその出典を調べてみると(調べると言ってもWEBでポチッとやれば調査結果はすぐに表示される)、以下の通りである。平成…史記「内平外成(内平らかに外成)」または書経「地平天成(地平ら

かに天成る」

昭和・書経「百姓昭明万邦協和（百姓昭明にして万邦協和す）」

大正・易経「大亨以正天之道也（大いに享りて以て正しきは天の道なり）」

明治・易経「聖人南面而聽天下嚮明而治（聖人南面して天下を聴き、明に嚮いて治む）」

明治以降でいえば『書経』（尚書ともいふ）と『易経』（周易とも）の比重が大きいが、その前の慶応は『文選』だそうで、四書五経でなければならぬわけではない。

次の平易というのは、実は難しい課題である。内容的にいくら立派なものであっても、誰も読めない書けないではお話しにならない。したがってあたり限りで画数の少ない文字が重宝される。そういう観点では、平成や大正は理想的な文字だったのだろう。その次の一般に使われていないというのは、たとえば協和発酵や作新学院などの名前を引き合いにだせばいいだろう。昭和の由来になった「百姓昭明にして万邦協和す」に見られる協和という言葉の名前に用いたのが協和発酵工業株式会社であり、作新学院の場合は『大学』の一節である「新民を作す」に拠る。他にも企業名、高校名、大学名などにあたれば四書五経に由来する名前がたくさん見つかる。新元号を考えるにあたっては、こうした存在する名前との一致は避けねばならない。識者より

候補が挙がってきた段階で、登記情報が調査されて既存名の有無がチェックされるはずだ。ただし商標ならデータベース化されているので調べられるのだが、私的な団体名や雅号のしらみつぶしは難しい。歴代天皇の諡など有名なものとはともかく、そうでないものには手が回らないと思う。結果、発表された後に「その言葉は昔から私が（我々が）使っていた」という声が上がるのは避けられない。

つらつらとご託を並べているが、そろそろ具体的な文言を挙げてみる。的中させるのは宝くじを当てるぐらいの難しさでも、買わないと当たらないのと同じように、案を出さないと的中確率はゼロになる。

【一】道光：易経・象伝益卦「自上下、其道大光（上より下に下る、その道大いに光かなり）」

【二】安仁：易経・繫辞上「安土敦乎仁（土に安んじて仁に敦し）」

【三】万志：尚書・仲虺之誥「德日新、万邦惟懷、志自満（徳は日新たにして、万邦は惟れ懷し、志は自ずから満つ）」

【四】立成：論語・泰伯「興於詩、立於礼、成於楽（詩に興り、礼に立ち、楽に成る）」

【五】悠天：詩経・王風「悠悠蒼天、此何人哉（悠悠たる蒼天、これ何人ぞや）」
とりあえず、めぼしい資料を適当に開いたところで目に留まった文言からランダムに五つぐらい作ってみた。全部が全

部、先に挙げたルールをクリアしているわけではないが、はてさて、いかがなものだろう。

(C)

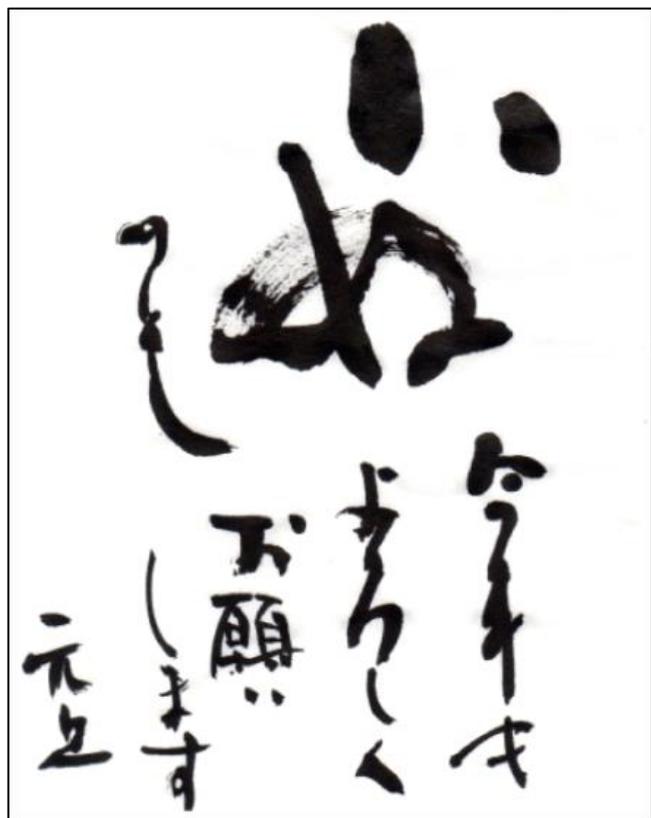
編集後記

新年あけましておめでとございます今年もよろしくお願いします

正月の二日に恒例の愛宕山に初詣に行きました。雪が一〇センチほど積り杉木立の道も凍っているところがありました。

年末に海運関係の雑誌編集長をしている先輩と三宮駅の高架下で飲んだ時に先輩が「近江商人の『自分よし、相手よし、社会よし、三方よし、』の考え方を引き継いでいる三井は良い、と言っていました。トランプの米国ファーストは自国第一主義で相手国や世界の事など考えずに米国だけのことを考えるやり方です。

日本の政治・経済界などにも多くの自分第一主義の人がいますが、それでは世界が良くならない。三方よしに至った近江商人の考え方を改めて再認識したいものです。



さらに満たされた一年へ

あけましておめでとう(ございます)今後も愛読の程、お願いします。

芥川だよりのページを改めてめくると、その始まりには、心配や不安、多少の戸惑いはあったけれど、基本的には、新鮮さを求めてきたと思います。

長い間には、人の心にも差移があるもの。

日々を常に理想通りにはゆかないものです。振り返ってみれば十年は過ぎました。いつの間にか、大小さまざまな生活感、それは時には、淋しい気持ち、楽しい気持ちになったり、これは贅沢だと感じた心のすべての裏には地道な生活があるのです。

不思議なのは、そんな日々の中でふと急に心の中に明るさが満ちて「楽になる時間」が必ずあるという事です。

そして私にとっては、その瞬間の多くは「芥川だよりの」を読んで下さっている皆さんのおかげ、そのおつきあいの中にあつたように思います。

忘己利他

「もうこりた」

字の通り、天台宗のお坊さんの教え。

私は、何度か心に呼びかけました。この年齢で何かを知る楽しみはない……。どこかで、じっと思っていたのですが。

その自分に、ハッと気付いたのです。同時に改めて日々の中で小さな新鮮さを見つけようと。

同じメンバーで、日々積み重ねることで、見えてくる新たな考え方、暮らしの一面を少しでも見つけて教えてもらえればうれしいです。どうぞよろしく。



俳句

国境なき戦い止まず去年今年
土田 裕

おほかたは
常と変わらず初景色

それぞれの
空白を読む賀状かな

初鶏の一声明けを待ちきれず

わが秀句だれも選ばず初句会

初富士や稜線寸のゆるみなし
影山武司

空も街も光に満つる淑気かな

海坂に日の橋渉る明の春

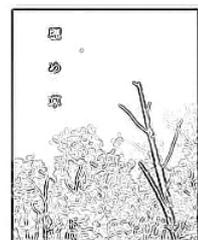
新札の折り目正しきお年玉

人日や仕事出る子の背を送り

灰暗き土間の餅花明りかな

【広告】

●芥川だよりに関連の電子出版です



埋め草 (山紫水明文庫)
大江雉兔 Kindle 版
¥ 341



はじめての奥駈 (山紫水明文庫)
苔迪散人 Kindle 版
¥ 504

AMAZONのセルフパブリッシングをつかった出版です。アマゾン・ドットコムで書名をご指定のうえ、検索してください。

●冬の京都観光

吉田神社の節分会をはじめ、「鬼」をテーマにした街歩きを企画しています。日程その他のお問い合わせは京都クルーズ・ザ・プロジェクトまで

(電話) 〇七五・七一・五六五九